

ラテンアメリカ時報

INFORMACION
LATINOAMERICANA

No. 1403

特集：身近になったラテンアメリカの新食品

2013年 夏号

アルゼンチンワインの話

最近のチリの鮭鱒養殖業

ブラジルの果汁産業と熱帯果実栽培 ―成長期から調整期へ

メキシコ牛肉の対日輸出について

補論 食卓を彩るメキシコ産農畜水産食品

パラグアイ産胡麻の生い立ち

ラテンアメリカ時事解説

フランススコ新法王登場の歴史的意味

パラグアイにおけるコロラド党の政権奪還―2013年大統領選挙分析

連載・読み物

歴史、図書案内

ほか



ラテンアメリカ時報

INFORMACION No. 1403
LATINOAMERICANA

2013年 夏号

特集：身近になったラテンアメリカの新食品

アルゼンチンワインの話	脊山 藤成	2
最近のチリの鮭鱒養殖業	菅原 辰実	6
ブラジルの果汁産業と熱帯果実栽培 ー成長期から調整期へ	岸和田 仁	9
メキシコ牛肉の対日輸出について	熊崎 栄一	12
補論 食卓を彩るメキシコ産農畜水産食品	河嶋 正之	14
パラグアイ産胡麻の生い立ち	白沢 寿一	16

ラテンアメリカ時事解説

フランシスコ新法王登場の歴史的意味	上野 景文	20
パラグアイにおけるコロラド党の政権奪還 ー2013年大統領選挙分析	磯田 沙織	23

33 カ国リレー通信 <第23回 ホンジュラス>

「おきて造り」の仲間たちと、シャーガス病対策（ホンジュラスの事例から）	橋本 謙	26
-------------------------------------	------	----

ラテンアメリカ随想

感動的な人達。フィデル・カストロとムヒカ大統領	牧内 博幸	29
-------------------------	-------	----

駐日ラテンアメリカ代表インタビュー <第8回 I DB>

式部 透 米州開発銀行アジア事務所長	工藤 章	32
--------------------	------	----

連載 歴史の中の女たち <第29回>

ポリカルパ・サラバリエタ ーコロンビア独立に捧げられた花	伊藤 滋子	36
---------------------------------	-------	----

ラテンアメリカ参考図書案内

ボリビアを知るための73章 第2版	5
日系ブラジル移民文学Ⅱ ー日本語の長い旅【評論】	8
ボサノヴァの真実 ーその知られざるエピソード	19
したたかな国キューバ ーシジョンは揺れても倒れない／中米の知られざる風土病「シャーガス病」克服への道	31
ブラジル略語集 ポ日両語 ー2013年度版	34
文化資本としてのデザイン活動 ーラテンアメリカ諸国の新潮流／古代マヤ 石器の都市文明【増補版】	35



■表紙写真
Foodex Japan 2013（3月 幕張メッセ）のメキシコブース
写真提供：在日メキシコ大使館商務部
■表紙デザイン
太 公良 グラフィックデザイナー

アルゼンチンワインの話

脊山 藤成

はじめに

アルゼンチンは（年度によって多少順位は入れ替わるが）フランス・イタリア・スペイン・米国に次ぐ世界第5位のワイン生産国である。また輸出货量で見るとこれにチリ・豪州を加えた第7位になる。

世界有数の恵まれた自然条件のなかで、多種多様の特徴ある美味しいワインを生産している。ここで書くのはそのうちのほんの僅かだが、よく知られている代表的な品種だけでも、赤ワインでは、マルベック、カベルネ・ソーヴィニヨン、シラー、ボナルダ、テンプラニージョ、メルロー等、白ワインでは、シャルドネ、トロンテス、ソーヴィニヨン・ブラン、シュナン・ブラン、アコンカグア等が挙げられる。

またアルゼンチンは、安く美味しい牛肉の生産国としても有名で、「ワインと牛肉」の組合せがマッチし、一人当たりのワイン消費量は1970年頃まで90リットル／年／人と世界トップレベルであった。しかし近年になるとビールをはじめ様々なアルコール類や炭酸飲料がブームとなり消費者の好み分散し始めたこと、アルゼンチン自体も経済破綻や激しいインフレに晒されたことから、上記の1970年の90リットル／年／人から1980年代に80リットル／年／人、その後急激に低下し2010年には30リットル／年／人まで下落した。これにともなって国内ブドウ農園総数も1990年には36,402件だったものが、2010年には26,133件となっている。

しかし廃業したのは、今なお国内の70%を占めるといわれる7.5ha以下の中小農園が主体で国全体のぶどう及びワイン生産量としては、大きく拡大している。一例を挙げると、国内ブドウ畑生産面積としては、90年の15,475haから10年の225,846haにまで大きく拡大、さらにその生産面積の70%以上は、1,500件の大型農園で占めていることから、統廃合の結果ブドウ農園の大型化・集約化が進んでいることがわかる。

生産量が増加する一方で、国内消費が減少しているため、近年アルゼンチンワインは輸出志向性が強まっ

ている。現在の主たる輸出相手国は米国・欧州向けで、ボトルワイン・バルクワインの両方が輸出されている。一方で、日本をはじめとするアジア諸国には、距離と知名度の関係から各国でのワイン原料となるバルクワイン（ワイン濃縮液）での輸出が多いため、そのままアルゼンチンワインとして飲まれることは少なく、日本での知名度は未だ低い。しかし2013年度も豊作となり、輸出余力も益々増加しているので、今後はアジア・日本向けへも数量拡大を狙っている。

アルゼンチンワイン 生産地域

アルゼンチンは、南米大陸南部に世界第8位の広大な面積を持ち、北部の亜熱帯ジャングルから高地・低地・湿地・大草原・森林・沼沢、そして南部の氷河まで多種多様な自然に富んだ国である。国土西部のチリとの国境沿いに、峻嶒なアンデス山脈が走り、この東麓地域で南回帰線から南緯40度までが主要生産地になる。州でいうと、中西部と称されるメンドーサ州、サンファン州の2州で生産量の90%以上を占めている。

ところで、世界中のワイン醸造元で使われる用語だが、フランス語でテロワール（terroir）という言葉がある。日本語で訳すと、風土・土壌のような意味だが、もう少し広義に、ブドウが生育する気候、土壌、それらを全て含めた環境のようなニュアンスになる。そしてアルゼンチンの生育地は、このテロワールに最も恵まれているといわれる。よく知られているように美味しいぶどうの生育には、温暖な気候、昼夜の寒暖差、気候は乾燥しながら土中水分は豊富、害虫の少なさ等がいわれているが、アルゼンチンの主要生産地は、まさにこの条件に適合する。中でもメンドーサ州は、Tierra del Sol y del buen vino（太陽と美



味しいワインの地」といわれ、アンデスの東麓地域ゆえ、偏西風の影響で、夏冬通しチリ側に比べ降水量は年間 200mm 以下と著しく少なく湿度は低い。よく乾燥しているため害虫被害が少ない。それでいて、アンデスの大量の雪解け水により河川や地下水が豊富で灌漑設備がしやすい。緯度的には温暖気候に属し、冬の寒さもさほど厳しくはない一方で、山地気候のため昼夜の寒暖差が大きい。例えば夏のメンドーサでは、日中 40℃ 近くまで気温が上昇するが、放射冷却現象で夜間は 10℃ を切ることもある。こうして最も生育する夏



マルベックの収穫風景（撮影者：筆者）

場に、土中水分があり、昼夜で激しく変化する気温に接したぶどうは、果実内で果汁の増加と濃縮を繰り返し、美味しさを凝結していくことになる。

またその収穫方法は、一部機械式もあるが 80 % 以上は、季節労働者による手作業での収穫で丁寧に収穫されてい

る。このようにテロワールに恵まれていることが、世界有数の良質なぶどうを生産し、それにより美味しいワインが生み出されている。

アルゼンチンワインの歴史

もともとスペインの植民地であった 16 世紀頃、スペインの宣教師 Juan Cedron によって最初のぶどうの苗木がもたらされたといわれている。ワインは宣教師にとってミサや洗礼を行う重要なアイテム。最初は、当時中心地であった東部及び中部地域でスタートしたが、その後中西部地域であるアンデス東麓に広がっていった。19 世紀に入ると欧州系移民者により新品種の苗木や新技術が持ち込まれ、1853 年には主要産地のメンドーサ州に初の農業学校 Quinta Normal de Agricultura de Mendoza（メンドーサ農業普通学校）が設立され、ぶどう育成技術に磨きがかかった。その後政府の支援も進み、灌漑用水局（現在は水利局）が出来、それまでばらばらだった水の使用法、配給量の調整等規則が整備され、徐々に灌漑地域も拡大。また他地域から出稼ぎが増え、人口も増加し街も発展していった。

栽培面積は 1873 年に約 2,000ha だったが、93 年には約 15,000ha になったといわれている。その後 20 世

アルゼンチン ワイン関連タイプ別 輸出货量

	輸出金額 (US \$ 千)		価格 (US \$ Per Liter)		輸出数量 (千 Liter)	
	2011	2012	2011	2012	2011	2012
ボトルワイン	716,180	740,698	3.82	4.07	187,420	182,146
テトラパック	17,182	14,496	0.84	0.81	20,498	17,821
その他パック	8,173	5,714	2.15	2.18	3,810	2,623
上記個別型ワイン合計	741,535	760,908	3.50	3.76	211,728	202,590
バルクワイン	84,832	134,060	0.83	0.85	101,774	157,297
スパークリングワイン	21,170	22,901	4.82	5.47	4,395	4,189
上記 ワイン 合計	847,537	917,869	2.67	2.52	317,897	364,076
ブドウ果汁濃縮(非アルコール)	209,404	238,255	1.90	2.19	110,317	108,753
ワイン+ブドウ濃縮果汁合計	1,056,941	1,156,124	2.47	2.45	428,214	472,829

ボトルワイン 国別輸出先

	輸出金額 (US \$ 千)		価格 (US \$ Per Liter)		輸出数量 (千 Liter)	
	2011	2012	2011	2012	2011	2012
米国	257,444	273,670	4.04	4.34	63,754	63,024
カナダ	80,418	83,962	4.19	4.39	19,177	19,139
ブラジル	63,724	55,039	3.66	3.82	17,409	14,395
英国	46,197	47,891	3.40	3.69	13,570	12,994
オランダ	38,136	35,126	3.34	3.44	11,426	10,209
中国	16,337	20,641	4.54	4.86	3,596	4,246
メキシコ	15,770	17,239	3.75	3.91	4,202	4,406
スイス	13,878	15,399	4.22	4.74	3,287	3,250
スウェーデン	14,338	12,954	3.74	3.91	3,830	3,311
ペルー	10,281	11,998	4.03	4.31	2,550	2,786
その他	159,656	166,780	3.58	3.76	44,619	44,386
ワイン輸出合計	716,179	740,699	3.82	4.07	187,420	182,146

出展 Wines of Argentina, Consejo Tecnico de Inversiones S.A.

紀に入るとアルゼンチンは世界経済の中に大きく組み込まれ、ワイン産業も国内より海外の影響を大きく受けるようになった。

1920年代から第二次世界大戦終了まで、アルゼンチンは世界大戦の直接の被害を受けることなく、また資源・農業大国として繁栄を謳歌。世界の食糧基地としてワイン産業も拡大した。しかしその後冷戦時代で世界経済が停滞期に入ると、海外からの投資も減少。エビータで有名な50年代のペロン政権、60年代から70年代の軍事政権へと政治体制が変遷していく中、緊縮経済による低価格ワインが全盛となり、ワイン産業は高品質が売れず、安価で大量に造れる内向き志向に変化。さらに80年代になると年1,000%のハイパーインフレ時代となり、経済の停滞から消費量は急減。ワイナリーも家族経営を主体とした小口メーカーが廃業するところも多く、結果として国全体の生産面積も90年に15,475haと20世紀初頭と同じ程度に戻ってしまった。しかし90年代に入ると経済再建が進みインフレが終焉。世界経済の好調さも相俟って急激に外国資本が流入し始め、世界的なワインブームとともに本格的な醸造会社が設立されるようになり需要が急増。原料不足を補うため急激に生産面積が広がった。97年には200,000haを超え一気に拡大したが、2000年代になると再び経済が破綻したこと、再び中小ワイナリーの倒産・廃業が進んだ。その後醸造会社の集約化や生産地域の統合を経て10年で225,846haとなっている。

このように、アルゼンチンのワイン産業は経済の波に揉まれながら隆盛と衰退という大きな変遷を繰り返してきた。しかし、その大波の中でも連続と培ってきた歴史と伝統があり、それが現在再評価されつつある。米国・豪州・チリといった新興国ワインとの競争に晒されながらも、謙虚に彼らに学び、新しい技術を積極的に導入し、それを自国のテロワールにあったものにする事で、価格競争力も身につけ、従来の輸出先である米国・欧州各国に加え、中国・アジア向けの輸出

量を伸ばしており、日本に対しても今後数量増加が期待されている。

アルゼンチンワインの代表的品種

アルゼンチンの代表的な品種と輸出量について添付資料を参照されたい。

先の資料のボトルワインの輸出量を品種別で見たものだが、数量・価格ともにマルベックが群を抜いていることがわかる。フランス原産種だが、今やアルゼンチンが圧倒的に多い栽培量を誇る。果皮が厚くタンニンが豊富で、ワインになると「黒ワイン」と呼ばれるほど色が濃い。香りはヴァイオレットの香りと称され強い芳香がある。肉料理に合うフルボディタイプであることから、「肉とワインの国」アルゼンチンの代表種になった。さらにポリフェノールの含有量が、全赤ワイン種の中でも最も高いため、日本はじめ世界でポリフェノール含有量を謳ったジュースやワインに多用されている。

次のカベルネ・ソーヴィニオンは説明不要だろう。フランス・ボルドーを代表とする世界で最も栽培されている品種である。酸味もよく、タンニンが豊富で全体のバランスがいい。そのため、マルベックと同様「ワインと肉の国」アルゼンチンに合う品種といえる。

上記2種が赤ワインの代表品種であるなら、次のシャルドネ及びトロントスは、白ワインの代表品種といえる。ともに重厚なボディのしっかりしたタイプ。まずシャルドネだが、香りは特にフルーティで、レモン、グレープフルーツを連想させる柑橘系。比較的生育時期が



アコンカグア（撮影者：筆者）

ボトルワイン 銘柄別 輸出量

	輸出金額 (US \$千)		価格 (US \$ Per Liter)		輸出数量 (千 Liter)	
	2011	2012	2011	2012	2011	2012
MALBEC	351,150	370,355	4.31	4.51	81,440	82,109
CABERNAT SAUVIGNON	72,221	71,271	3.87	4.19	18,665	17,017
上位2種ブレンド	53,704	53,355	3.98	4.59	13,505	11,634
CHARDONNAY	39,205	36,168	3.48	3.75	11,269	9,657
TORRONTES	22,933	19,021	3.53	3.80	6,501	5,010
その他	176,967	190,528	3.16	3.36	56,039	56,718
ボトルワイン 合計	716,180	740,698	3.82	4.07	187,419	182,145

出展 Wines of Argentina, Consejo Tecnico de Inversiones S.A.

短いので、収穫期前の雹や霜害への対策として育てているワイナリーが多い。

トロンテスは、アルゼンチンが原産ではないが、マルベックと同様アルゼンチンが、世界で最も多く栽培しているので、赤がマルベックなら白はトロンテスがアルゼンチンの代表といえる。マスカット種に近いので、その房の大きさと芳香の強さは畑に入ると直ぐに品種が見分けられるほどである。これから作られる白ワインもまた他にはない特徴を持ち、色はライトイエローからライトグリーンと称され、香りはマスカットからハーブ、バラ、紅茶等いろいろな例えられるが余韻を残す芳香といわれる。

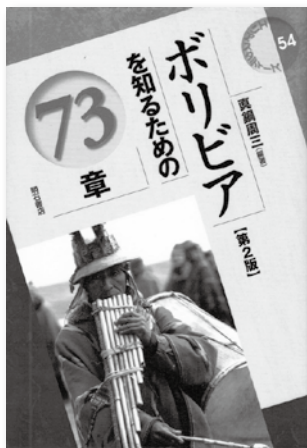
以上のように、他国産とは違った品種がアルゼンチンワインの特徴で、単純な人気品種だけでないのも長い歴史があり独自に発展してきたためである。なお特徴あるワインが多いアルゼンチンで、最も変わったワインというと、アコンカグアと呼ばれるものがある。通常種のおぶどうが一房3～4kgに対し、アコンカグアは

7～9kgと巨大な白ブドウ。南米最高峰の名前がつけられたように、アルゼンチンで品種改良されたものだが、その巨大な房の割りに、一粒一粒が驚くほど甘く、殆どは果汁用に使われるが、一部ワインに用いられ甘みの残る芳香な白ワインになっている。

最後に。かわいい子とワインには旅をさせろという言葉がある。子供は旅先の苦勞の中で成長し、ワインは時間の経過と揺られる攪拌効果で熟成が加速する。過去にもフランスの大手ワインメーカーアンリ・メール社が出した2002年産の赤ワイン、その名も「世界一周」は同じ品種のワインに比べビロードのような味わいだったと高い評価を受けたことがある。遠方のワインはまた格別の味わいかもしれない。そう、日本から最遠の地で生産され、長期間揺られて届いたアルゼンチンワイン、ご機会あれば是非味わっていただきたい。

(せやま ふじのり 丸紅アルゼンチン会社 社長)

ラテンアメリカ参考図書案内



ボリビアを知るための73章 第2版

眞鍋 周三編著 明石書店 2013年2月 409頁 2,000円+税

ボリビアといえば、錫などの鉱物に近年生産量が伸びてきた天然ガス、さらには次世代電池材料として世界が注目するリチウム資源、広大な低地での大豆等の農牧産業と潜在力が大きな国だが、依然南米の最貧国の一つから脱しえない。2005年12月の選挙で初の先住民出身のエボ・モラレスが大統領に当選し、ベネズエラの故チャベス大統領の盟友として、資源の国有化と反米的言動で世界の注目を集めたが、“黄金の椅子に座っている”と揶揄されているが、なぜ国民は貧しいのか？なぜ経済発展が進まないのか？そもそもボリビアとはどういう国かを知る上で、その姿を歴史、政治、経済、音楽、旅行、トレッキング、その他暮らしの風景、文化、芸術、食べ物、フォルクローレ・民俗楽器、観光案内などから、アンデス高地が国土の30%を占めるため旅行者への高度順化等旅の注意に至るまで、73のテーマについて、識者・専門家が分かりやすく解説している。

本書は、2005年に出版されたものの第2版だが、ウユニ塩湖にある膨大な量のリチウム資源、モラエス政権による「ボリビア多民族国」の始動と先住民政権の抱える民主的革命的矛盾などを加筆し、参考文献の乏しい現代のボリビアの姿に至るまでを紹介している。

〔桜井 敏浩〕

最近のチリの鮭鱒養殖業

菅原 辰実

南米のスイスと言われる美しい南チリの景色、氷河で削り取られた高い山々と、1年に200日以上降る雨に育まれた森林に囲まれて、湖、清流で育ち、豊かなフィヨルドの海で大きくなるチリ産の鮭鱒、最近のチリの鮭鱒養殖業で起きている事、チリ政府と民間養殖会社が一体になって養殖事業を持続可能な産業として育成している状況をご紹介します。

チリ産養殖鮭鱒輸出と日本の輸入

2012年のチリの鮭鱒の総輸出金額は2,873百万ドルで、チリの年間総輸出金額の4%を占める。輸出金額の54%は銅で、銅以外の輸出品の中では、鮭鱒は木材パルプ関連、果物、ワイン等と並んで重要品目である。一方、日本の12年の食料品輸入5兆8,496億円に占める魚介類輸入金額は1兆3,915億円、その中で鮭鱒輸入金額は1,679億円であり、魚介類輸入の12%、食料品総輸入の3%を占める。日本の鮭鱒輸入金額の65%がチリ産鮭鱒である。

チリの鮭鱒養殖と日本の関係

鮭鱒はもともと南半球には棲息しておらず、北半球から持ち込まれた魚だ。1970年代のチリ鮭養殖黎明期、日本は重要な役割を果たした。「南米チリをサケ輸出大国に変えた日本人たち」(細野昭雄著)に詳しいが、72年にJICAがチリ政府の鮭放流事業協力を開始し、その後のチリの鮭養殖発展の礎を築くことに貢献した。78年には日魯漁業(現マルハニチロ)が、三菱商事との合弁でチリにEmpresa Pesquera Nichiro Chile社を設立し、大型トロール船漁業事業を営む傍ら、南チリの零細漁民の生活向上に資する事を目的として銀鮭養殖事業を開始した。電気も水道も来てなかった地域の海面に生簀を設置し、81年2月に130トンの銀鮭の取揚げに成功し、チリの企業鮭鱒養殖のきっかけとなった。日本の海面鮭養殖も77年に日魯漁業の指導により宮城県志津川で始まったばかりで、当時の先端技術を供与した。88年にはニッスイが鮭鱒養殖事業(Salmones Antartica社)に参入し、その後事業を拡大している。

養殖エリア

鮭鱒養殖の中心はチリ南部の10州と11州で南北直線距離450kmほどである。Puerto Monttは10州(Los Lagos)の首都、人口25万人の港町で、多くの鮭鱒企業のオフィスが集まる。南緯41度28分にあるが、日本なら函館が北緯41度78分だ。年間の降雨量は1,863mm(東京は1,528mm)、年間平均気温は10.7度(東京は16.4度)で、フンボルト海流の影響で高緯度の割には冬でも雪は減多に降らず、夏は涼しい。また、年間降雨日は215日と東京の2倍で雨天日が多い。海水温は、8度から16度の範囲で年間推移しており鮭鱒にとって快適だ。

淡水を使用する稚魚の生産方式には、湧水や川の水を直接利用する「かけ流し式」、水をリサイクルする「循環式」、湖の生簀で飼育する方式があり、湖が多く、清流が流れるチリ南部の各所に好立地がある。

法的環境

チリの漁業と水産養殖業に関しては、General Law on Fishery and Aquacultureが基本法である。

行政としては、Ministry of Economyの中にSubpescaという組織があり、持続的な養殖環境維持を目的とする規制や法律の起案を担当し、Sernapescaという別組織が、許認可や、規制の順守状況の監査業務を行っている。

海面に生簀を設置する為に必要なコンセッション(養殖権)は海軍省の管轄で、10州と11州に1,174コンセッションがある。生簀を設置する場所はコンセッション毎に定められ、鮭鱒の種類と生産数量の上限もSernapescaが審査し決められている。養殖を開始するにはMinistry of Environmentの環境許可書も必要だ。鮭鱒養殖エリアの海面は10州では22区、第11州では37区の海面区域に分けられている。海面区域毎に約2年間の養殖可能期間と3か月の休止期間が交互に定められており、2年に一度、各海面区域に所属する全ての養殖場が生簀を空にして海を休ませる。

過密養殖を防ぐため、放養密度についても上限が定められ、本年の法改正では前回の養殖成績が悪い場合、次回の養殖の放養密度を下げなければならない。取上

げ後は海底の汚染状態について当局の検査があり、汚れている場合には一定の基準を満たすまで養殖場は再開出来ない。養殖期間中は、毎日死んだ魚を回収し、死亡原因を確認・分類・記録し当局に報告する。養殖エリアに入る時は、手や靴を消毒し、菌の持ち込み防止を徹底する事も義務だ。魚病対策は予防が重要だが、稚魚は一定のサイズになったらワクチン与えて病気の予防をする事も定められている。

チリ鮭鱒生産状況

ノルウエーとチリの二か国が世界の養殖鮭鱒の六割を生産する主要生産国で、最近のチリ全体の生産量は年間60万～80万トンだ。内訳はアトラン鮭が六割前後、トラウトが二～三割、銀鮭が二割である。

アトラン鮭は、ノルウエーで100万トン以上、チリでも40万トン前後生産される主要魚種であり、餌会社や発眼卵（受精した卵）供給会社も多額のR&D費用を投じており、遺伝子マップに基づく選抜育種など、研究が進んでいる。発眼卵は、大部分がチリで生産されており、魚病を持ち込まないように許可なしに輸入は出来ない。海面成育期間は15～18か月と長く、4～5kgで収穫する。本年の生産数量は、魚病の発生と魚の体表に付く甲殻類（Caligus）の大量発生による早揚げがあり、当初は55万トン強の予想だったが、一転して40万トン半ばまで減少する可能性がありそうだ。

銀鮭は、アトラン鮭やトラウトと異なり、秋になって産卵すると死んでしまうので、春先10月から取上げを本格化し、晩夏の翌年2月には収穫を終える。海面養殖期間は10か月前後で、3kg位で取り上げる。成長も良く、比較的飼育が楽な魚種だ。

トラウトは、身の色が濃い赤色で日本では刺身商材として好まれる。チリで生産する発眼卵に加えて、周年養殖を行う為に、夏冬が逆のデンマークからの輸入も行う。塩分濃度が低い汽水域を好み、海面養殖期間は10か月強で、3kg弱で取り上げる。本年は魚病発生による早揚げや、昨年の日本市場の低迷の影響による生産調整で、銀鮭同様に昨年比減産が予想されている。

鮭鱒の餌

餌は人工飼料を使う。飼料原料として、かつては魚粉、魚油が原料の五割であったが、価格を抑える目的で、植物油等による原料置き換えが進み、現在では魚粉、魚油の割合は二割程度に下がっている。それでも昨今の原料価格高騰で、飼料価格は昨年から上昇している。

鮭鱒の海面輸送

チリでは現在39隻の活魚輸送船が稼働しており、活魚を入れるタンクの水量合計は35千トンで、年間1,400千トン程度の鮭鱒輸送能力がある。工場に活魚状態で輸送されてくるので、鮮度は抜群だ。



海面生簀で鮭をフィッシュポンプで収穫作業中の活魚輸送船（著者撮影）

チリ鮭鱒の市場

チリ鮭鱒の輸出先は、去年は金額ベースで日本向け4割、米国向け3割、ブラジル向け1割となっており、3か国で8割を占める。

トラウトの輸出先は日本向けが3分の2を占め、米国向けとロシア向けがそれぞれ1割弱となっている。日本には、冷凍ドレス（内臓除去、頭なし）や冷凍フィレーの他、スモークサーモンに加工されて輸入される他、タイ等に冷凍ドレスで送られて、コンビニのシャケおにぎりの具材や回転寿司のネタ等に加工されている。銀鮭は9割が日本向けで、大半が冷凍ドレスで輸入され、切り身に加工され量販店に並ぶ。

アトラン鮭は米国向け5割、ブラジル向け2割が主要市場。米国へは主に生鮮フィレーが空輸され、量販店やレストランチェーンに販売される。

ブラジル向けには丸魚のまま内臓除去後に氷詰めに入れ、トラックで陸送される。ブラジルでは寿司ブームが定着し、寿司・刺身ネタは鮭が中心食材である。

鮭鱒養殖の今後

鮭を使った料理は多彩であり、世界の需要はまだまだ拡大中だ。日本の食文化である寿司は、今や世界中に広まったが、鮭が果たしてきた役割は大きい。一方で、養殖に適した海域は世界でも限られており、世界需要に追い付くほど生産数量を伸ばすのは簡単ではない。鮭鱒養殖は、四十年程度の歴史しかない新しい産業で、

これからも技術革新を進め、自然環境を大切に保全しつつ、持続可能な産業として発展させるべく、官民をあげて取り組んでいる。

Salmones Humboldt 社 (SH 社) の状況

三菱商事は、スモークサーモンメーカーの三洋食品を傘下に持つなど、日本の鮭鱒輸入販売では業界大手としてチリ産養殖鮭鱒も 1990 年代から取扱いを本格化している。今後予想される需給逼迫に備え、従前の輸入買付に加え、自ら鮭を養殖し、安定供給体制を強化する事によって、お客様のニーズに 대응していくべく、2011 年に SH 社を買収し、淡水・海面養殖・加工部門を有するインテグレーション事業に参入した。SH 社は、今年度 3 万 6 千トンの鮭鱒を生産する予定だが、一番北と一番南の養殖場の緯度差は 4 度あり、東京と盛岡の緯度の差くらいある。昨年 12 月から新活魚輸送船を他社と共同で稼働させ、海面養殖場から Puerto Montt の加工場まで活鮭鱒を運んでいる。アトラン鮭の稚魚は循環式の生産施設で生産しており、使用する水の紫外線殺菌等によりワクチンだけを使用し、抗生物質の使用をゼロに抑える事に成功している。トラウト稚魚はルパンコ湖にある大学の施設で生産している。ルパンコ湖の面積は 223km²で、日本の霞ヶ浦 168km²やサロマ

チリの鮭鱒輸出数量推移 (表1) (単位: トン)

魚 種		商品形態	2010	2011	2012
アトラン鮭	生鮮	Head on	28,500	39,500	72,154
アトラン鮭	生鮮	フィレー	20,022	41,236	73,154
アトラン鮭	冷凍	ポーショ	4,700	7,200	18,000
アトラン鮭	冷凍	Head on	13,900	24,100	44,500
アトラン鮭	冷凍	ドレス	3,103	6,807	8,926
アトラン鮭	冷凍	フィレー	12,700	20,800	38,900
アトラン鮭	冷凍	スモーク	2,400	3,300	4,200
小計			85,325	142,943	259,834
トラウト	生鮮	フィレー	8,801	8,081	7,846
トラウト	冷凍	ドレス	64,433	65,493	77,813
トラウト	冷凍	フィレー	36,032	41,044	43,124
小計			109,266	114,618	128,783
銀鮭	冷凍	ドレス	75,975	103,549	106,594
小計			75,975	103,549	106,594
総合計			270,566	361,110	495,211

(チリ政府輸出統計)

湖 150km²よりも広大で、常に高山から豊富な淡水が流れ込むので 4 年で湖全体の水が入れ替わる。チリ政府が湖を観光資源として重視し、湖での鮭鱒養殖を規制する方向なので、トラウト稚魚生産施設をルパンコ湖から流れ出す川の畔に建設中で、環境に配慮し取水と排水の殺菌設備を備える予定である。

(すがわら たつみ SALMONES HUMBOLDT Ltda 社長・CEO)

ラテンアメリカ参考図書案内



日系ブラジル移民文学 II ー日本語の長い旅 [評論]

細川 周平 みすず書房 2013 年 2 月 784 頁 15,000 円+税

これまで日系ブラジル文化の音楽、映画、芸能等について論じた書物を出してきた著者による、既紹介の第 I 巻に続く日系ブラジル移民文学の大部な総合的研究書の第 II 巻。第 I 巻では日系ブラジル人による文芸の 100 年の軌跡をジャンル別に追った「歴史」編だったが、この第 II 巻では概念、同人誌、題材、作品、人物などを個別にあたり、「耕す」では戦前の農村文学を詩歌、川柳、都々逸を例に、「争う」では戦後間もない勝ち組・負け組抗争の文学と論争的な『コロニア文学』(1966 ~ 77 年) の創刊から移住の終わりかける時期の文学を、「流れる」では、移民の移動体験、居場所のなさを戦前戦後の数編から、「乱れる」では奔放な女性の性遍歴を扱った 2 編を取り上げ、「渡る」では海を渡った移民が、日本の風土で生まれた俳句、短歌をいかに移植したかを、最後に付論「対蹠地にて」では、かの石川達三の『蒼氓』ほか 2 編の日本での小説により論じている。

日系ブラジル移民の文学に関わる膨大な資料に目を通して、その全容を記録しようとした、著者の 20 年にわたる調査の貴重な記録と解析の集大成であり、偉大なる労作である。

(桜井 敏浩)

ブラジルの果汁産業と熱帯果実栽培 ―成長期から調整期へ

岸和田 仁

はじめに

ブラジルの果実類が多様でおいしいことに感嘆したのは、19世紀欧州から学術調査に訪れた博物学者たちばかりでなく、例えば、「内幕もの」と呼ばれた一連の紀行評論において世界各地の実態を魅力的な文体で読者に明らかにした米国人ジャーナリスト、ジョン・ガンサーも同様だ。マラクジャ（パッションフルーツ）ジュースを初めて飲んで感激し、「ブラジルの果物は格別だ」といって、マンゴ、パパイヤ、カランボーラ（スターフルーツ）、ジャッカ（ジャックフルーツ）、ピタンガ、ジャブチカーバなど、片っ端から食べては、感動している。1966年のことだ。

多様なフルーツがあれば、その栽培技術の改良で生産性を向上させ、その収穫物やその加工品を世界市場へつなぐビジネスも発展するのは当然である。ブラジル世界一物語で必ず登場するのが、コーヒー、砂糖とオレンジジュースといったところだが、本稿では、ブラジルにおける果汁産業と熱帯果実栽培について概略フォローしてみたい。

オレンジ栽培小史

インド原産と考えられるオレンジが、欧州経由でブラジルに導入された正確な年代は不明だが、植民地時代（16世紀）である。長い間裏庭の栽培に留まっていたが、1920年代に入ってリオデジャネイロ州ノヴァ・イグアス地区で初めて商業的栽培がおこなわれ、それが漸次“西進”していく。サンパウロ州中部（アララクアラほか）でコーヒー代替作物としてオレンジ栽培が急激に広がるのは50年代以降である。オレンジに関してはブラジル全体の70%前後を占めるサンパウロ州の栽培面積がピークに達した90年代は80万haとなったが、その後は漸減傾向をたどり、2009年70万ha、11年57万ha、13年46万haとかつての半分に近づいている。一方、灌漑や品種改良、植付密度アップなどの農業技術向上により、ha当たり平均収穫量は97年の15トンから12年の29トン（優良農家の場合は80トン）へとほぼ倍増しているため、90年から10年までのスパンでみると、栽培面積は8%減少したが、収穫量は22%増加となっている。（90lb入りバスケット換算

で、11年収穫量は380百万ケース、12年は364百万ケースであった。）

搾汁企業による自社栽培面積拡大がサンパウロ州やミナスジェライス州においてなされているものの、サンパウロ州の一般自営オレンジ栽培農家は、コスト割れを理由にサトウキビなどへの転作を急速に進めており、栽培面積全体が早いペースで縮小してきているのは厳然たる事実である。（主な転換作物サトウキビの、サンパウロ州における栽培面積は09年488万haから13年553haへと増加中だ。）但し、第2の栽培地域であるノルデスチ（バイーア州、セルジッペ州）における栽培面積は若干増加しており、ブラジル全体としてみれば、栽培面積は11年88万haから12年90万haへと微増、収穫量は11年19.6百万トン、12年18百万トンとなっている。

今後に関しては、生産性の向上と海外市場の多様化によりブラジルのオレンジ農業はまだまだ伸びるといえる楽観的な見方もないわけではないが、急拡大期から転換期ないし調整期に突入したといわざるを得ない。識者によっては、これから停滞期ないし老衰期に入っていくとの悲観的な見方をする者もいる。

オレンジ果汁産業

ブラジルにおける最初のオレンジジュース搾汁工場が設立されたのは1959年であるが、FOJC（冷凍濃縮オレンジ果汁）加工事業が急成長を遂げるのは、70年代から90年代にかけてである。民族資本系も多国籍企業も入り混じって、大手企業といえるのが10社以上“乱立”していた90年代の93年に、ヴォトランティン財閥がCitrovita社を設立してジュース業界に参入したが、このあたりが、“オレンジジュース戦国時代”のピークであったといえよう。

2000年代に入り統合・再編成の時代を迎える。まず04年7月、穀物メジャー最大手のカーギルがFOJC事業からの全面撤退を決定し、業界を震撼させる。10年5月にはCitrosucoによるCitrovitaの吸収合併が発表され、本案件は11年12月にCADE（ブラジル版公取委）が正式承認している。

こ う し て、12 年 以 降 は、Citrosuco, Cutrale,

LouisDreyfus の三社寡占体制となっているが、ブラジルのオレンジ果汁産業の特徴といえることは、搾汁コンビナートが加工生産する FOJC の 95 ～ 98% が輸出向け、という輸出依存体質である。

世界で貿易・流通する FOJC の 80% がブラジル産であるが、ブラジルのオレンジジュース輸出量（Brix66 の FOJC 換算）の過去 10 数年間の推移をみると、2000 年から 06 年までは 120 万トンから 140 万トンの間を上下していたが、07 年以降は同年の 141 万トンをピークに、09 年 130 万トン、10 年 120 万トン、11 年 115 万トン、12 年 118 万トン、13 年（見込）105 万トン、と明らかに漸減してきている。一方 FOJC 生産量は漸減とっていないため、13 年 4 月現在、年間輸出量の 50% 以上にあたる 60 万トンが国内在庫となっている、という厳しい状況にある。

現在のオレンジ果汁業界が直面する最大の問題は、主な消費市場である欧州並びに北米における末端需要の減退（03 年と比較すると 11 年の欧米需要は 30 万トンの減）である。新興国（ブラジル、ロシア、インド、中国、メキシコ）におけるジュース需要の伸びは、11 年の数字は 2003 年に比し、10.7 万トン増、パーセントでは 55% 増となっているが、この新しい消費増トレンドも世界全体の消費減退をカバーできていない。すなわち、世界全体の FOJC 需要は過去 9 年間で 20 万トン減少している。これがオレンジジュース市場の現実である。

熱帯果実栽培

ーサンフランシスコ河中流域におけるマンゴの事例

南アジア原産のマンゴがブラジルに導入されたのは植民地期の初期と思われるが、Haden, Tommy, Kent, Palmer といった改良種が大規模栽培されるようになるのは、ミナスジェライス州やノルデスチにおける灌漑農業プロジェクトが展開され始めた 1980 年代以降のことである。

なかでも「新カリフォルニア」と呼ばれる、サンフランシスコ河中流域の事例が特徴的である。ニューヨークタイムズ紙が、「この地域は、灌漑農業としてはラテンアメリカにおいては最大の成長を遂げた」として長文の特集記事を掲載したのは 94 年 3 月 25 日のことであったが、ブラジルの熱帯乾燥地帯における灌漑農業フロンティアの成功例として広く知られるようになる。

ペトロリーナとジュアゼイロという双子都市を中心



ソブラディーニョダム

とする、この地域における灌漑農業は、68 年に設立されたベベドウロ・プロジェクトを嚆矢とするが、実質的開発が具体化するのには、貯水量 314 億トンという南米最大の人造湖ソブラディーニョが完成した 78 年以降である。特に総面積 56,200ha というニーロコエリョ・プロジェクトが立ち上げられた 84 年以降、本格化していくが、南部から“転戦”した百数十家族の日系農家の参入によって、農業技術の革新（マンゴの開花時期調整、ブドウの強制剪定、塩害対策など）が推進され、同地は熱帯果実の主産地へと変貌を遂げるのである。

永年作物としてはブドウとマンゴが同地域の代表格であるが、ここではマンゴの事例をフォローしてみよう。

植付面積をみていくと、91 年 3,220ha、92 年 4,230ha、93 年 5,400ha、94 年 6,200ha であったのが、2005 年 18,000ha、11 年 39,000ha と急増している。収穫量の推移は、91 年 8,000 トン、92 年 12,000 トン、93 年 20,000 トン、94 年 35,000 トンから、05 年 270,000 トン、11 年 450,000 トン、となっている。

ちなみに、ブラジル全体のマンゴ生産量（生果）は、08 年 1,154 千トン、11 年 1,188 千トン、であり、輸出数量は 08 年 133,724 トン、11 年 126,430 トンとなっているので、同地域のマンゴのシェア率は、全国生産量の 40% 前後となるが、輸出に関しては、輸出量全体の 90% 前後を占めている。これは同地域の自然条件、とりわけ年間日照時間 3,500 時間という“太陽の恵み”のおかげで、糖度の高い果実が収穫されるからである。

熱帯果汁 ーアセロラとアサイの事例

ブラジルで事業化されている柑橘類以外の果汁加工としては、マラクジャ（パッションフルーツ）、パイナ



マンゴー畑

アップル、リンゴ、グァバなどがあるが、本稿では、欧米市場でスーパーフルーツとして注目されているアセロラとアサイの事例に言及する。

天然ビタミンC含有量で抜きん出ているアセロラは、ペルナンブーコ連邦農科大学の教授が1955年プエルトリコから持ち帰った250粒のうち10粒の種子が発芽した、というのがブラジルにおけるルーツである。長年にわたって農事研究農園内で“幽閉”されていただけであったが、庶民層の栄養改善を目的とするアセロラ植付キャンペーンが同大学によって80年代前半開始されてから、栽培作物として認知されるようになる。ノルデスチ（東北部）やノルチ（北部）において商業栽培が広まるのは80年代後半からである。2012年現在、州でいえば、パラ、ピアウイ、セアラ、リオグランデ・ド・ノルチ、パライーバ、ペルナンブーコ、セルジッペ、バイア、エスピリトサント、サンパウロ、パラナなどで栽培されており、年間推定収穫量4万トン。果汁用ないし天然ビタミンCサプリメント用向け加工事業体としては、大手といえるのが数社、国内市場向け冷凍ピューレ加工を行う中小業者も加えれば十数社となっている。

アマゾン河の川縁に自生するアサイ・ヤシの実（の表皮部分）は、鉄分、ミネラル類、ポリフェノールなど豊富であるが、もともとはベレンを中心とする地元民が常食とする純ローカルなものであった（食べ方は、ファリーニャ（マンジオカ粉）と混ぜたり、ジェラート形態が主体）。それが、リオデジャネイロやサンパウロのスポーツ愛好若年層によって“発見”されたことで、90年代後半からブラジル国内市場がブレイク、その数年後には米国への輸出が本格化した。今や、ハワイで



アサイヤシ

も日本でも“トレンドリーな飲料”となっていることは周知のとおりだ。天然採集がまだ主体だが、商業栽培も急拡大中で、年間推定生産量80万トンのうち9割前後がパラ州産であり、収穫・流通・加工・販売などアサイ関連で創出される雇用は30万人といわれている。

（なお、引用した統計数字は、IBGE（ブラジル地理統計院）、IBRAF（ブラジル果実協会）、CitrusBR（ブラジル柑橘輸出者協会）、アサイに関してはパラ州のデータに基づいている。）

（きしわだ ひとし ニチレイブラジル農産（有）監査役）

メキシコ牛肉の対日輸出について

熊崎 榮一

はじめに

2013 年は日本の牛肉市場に取って大きな転換期になると予想される。それは日本政府が BSE 発生国である米国産などの牛肉の月齢制限を 30 ヶ月まで緩和する措置をとり、輸入品に対しては 2 月生産分から国内市場に流通がはじまった。

01 年 9 月に日本国内で初めて BSE の感染牛が確認されて 12 年、03 年 12 月に米国で BSE が確認され対日輸出が 20 ヶ月月齢以下に制限されてから 9 年の歳月が流れ、日本の牛肉市場を取り巻く環境は大きく変わって来ている。

この間にメキシコは 1991 年以降低迷していた対日牛肉輸出を 2004 年に再開し、07 年からは日メキシコ経済連携協定（EPA）の恩恵をうけ、12 年には対日輸出数量を 26,294 トン（内臓肉を含む）まで伸ばし、日本の牛肉輸入市場の 4.6% を占めるまでになってきた。

メキシコの牛肉産業

メキシコは世界有数の牧畜大国であり、牛肥育頭数は 2,000 万頭と世界第 9 位に位置する。また、メキシコは世界最大の肉牛輸出国であり、年間 150 万頭を主に米国へ供給している¹。

2011 年の北米を襲った大干ばつと穀物相場の高騰により飼育頭数は減少傾向にあるが、牛肉の生産は逆に過去 5 年間増加傾向にある。08 年に 160 万トンであった牛肉生産量が 12 年には 182 万トンへと 13.7% 増加した。この間、メキシコの牛肉輸出は目覚ましい発展を遂げている。1990 年代中頃に本格的に始まった輸出が 12 年には 20 万トンに達し、今後とも増加する傾向にある。その一方、伝統的に牛肉輸入国であったメキシコは 08 年の 40 万トンから 12 年には 22 万トンと 45% も輸入量を減らして来ている。

メキシコ牛肉の日本市場への参入

メキシコの本格的な牛肉輸出は 1990 年代中頃にはじまるが、対日輸出は 80 年代中頃から細々として行っていた。日本が牛肉の輸入自由化を行う 91 年以前、メキシコは日本の牛肉輸入割当制度下の開発枠を利用し、4 千トン前後（88 年 4,400 トン、89 年 4,300 トン、90 年 3,700

トン）の牛肉を日本に輸出し、ほとんどが学校給食用に加工されていた。その後、生産コストの高い² メキシコ牛肉は日本市場からほとんど姿を消した。

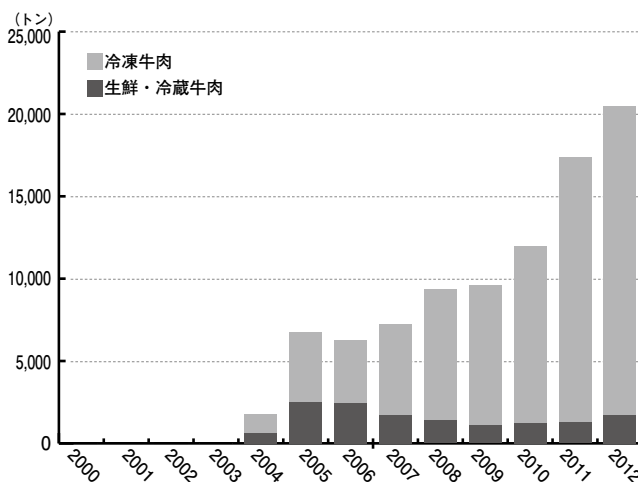
03 年まで低迷していたメキシコ産牛肉の対日輸出が再開された最大のきっかけは、カナダ及び米国で発生した BSE により両国からの牛肉の対日輸出がストップしたためである。

世界の牛肉生産国の中で対日輸出ができる国は、動物衛生上非常に限られている。先ず口蹄疫などの日本が禁止している家畜伝染病の発生が無いこと、並びに BSE の非発生国であることが日本政府の掲げる条件である。この二つを満たす国は、04 年当時唯一オセアニア諸国とメキシコ、そしてパナマ以北の中米の国々だけであった³。その中で、米国・カナダのように穀物肥育をおこなっている国はオーストラリアの一部を除きメキシコだけであった⁴。

04 年に再開した対日輸出は 05 年に一気に 6,700 トンまで輸出を伸ばすが、あくまで米国産牛肉の「代替品」としての緊急輸入との位置づけで、その品質の違いから翌 06 年には前年比 7.2% 減と対日輸出が減少する⁵。

しかしながら、07 年 2 月にメキシコ最大手のパッカーが日本事務所を開設して積極的な営業活動をすることにより、大手弁当チェーン等への安定的供給が決まるなど、コンスタントな対日輸出増の基礎を築いた。さらに、05 年に発効した日本・メキシコ経済連携協定

メキシコ牛肉対日輸出 2000 年 - 2012 年



に基づく関税割当制度が07年度より牛肉にも適用され、少ない関税枠ではあるが対日輸出増に大きく寄与してきた⁶。

その後も、対日輸出は順調に伸びてきており、12年には内臓肉を除く正肉で20,509トンを出し、04年以来12年まで年平均18.6%の成長を記録した。

それでは、なぜメキシコ産牛肉の対日輸出が飛躍的に増えてきたのか。カナダ、米国でのBSEの発生がメキシコ牛肉の対日輸出再開の大きな要因になったのは事実であるが、そのチャンスを生かすことが出来るような産業構造の変革⁷と政府業界団体の対応⁸、また日本とメキシコ両国間の経済連携協定締結が大きく寄与していることは明らかである。

メキシコ最大の牛肉パッカー・スカルネの実績

多くのメキシコ牛肉パッカーは主に米国にある日系の輸出業者（ブローカー）を経由して日本に牛肉を輸出しているため、日本市場のニーズと価格動向の情報がブローカーを通じたものとなり、効果的なプロモーションを計ることが出来ないでいるのが現状である。

こうした中、スカルネ社は2007年に日本事務所を開設し、日本の食肉輸入業者への直接販売に切り替えることでコストの削減とスムーズな情報交換を計り、メキシコ産牛肉の日本市場における認知度をアップさせるとともに輸出量を増やしてきた。その結果、日本最大の牛丼チェーン店への直接輸出を開始するなど、味とコストを追求する大衆大量消費マーケットでは欠かせない原料供給パッカーの一つになってきている。

メキシコの対日輸出に占めるスカルネ社の割合は04年には20.3%に過ぎなかったが、12年には実に83.6%

を占めるようになった。

日本市場の変遷

2003年にカナダ及び米国でBSE感染牛が確認されてほぼ9年間、両国からの牛肉が20ヶ月月齢までに制限されていた。30ヶ月まで緩和されれば輸入量が増えさらに価格が大幅下落すると期待されていた。

しかし、この間に世界の市場は様変わりしており、BSE前まではほぼ独占的に日本市場に輸出されていた牛井用のバラ肉（ショートプレート）と牛タンの市場がこの9年間に日本以外の特に新興国で出来上がっていたのである。穀物価格高騰の影響による現地生産コスト高と円安による国内輸入価格の上昇と相まって、月齢制限を緩和したにもかかわらず国内輸入価格が期待していたように落ちない現象が生じている。また、これらの部位以外は国際価格の上昇を受け、対日価格は高止まりしている。

この結果、少しでもコストの安い穀物肥育牛肉、すなわちメキシコ産牛肉への需要が引き続き高まってきていると言える。

メキシコ牛肉の今後

メキシコは穀物肥育牛肉の生産国の中で比較的手間賃が安いと、米国やオーストラリアでは出来ない歩留まりの良い製品作りが可能である。加工品でも正肉と同じ38.5%の関税がかかるため、差額関税制度⁹の豚肉のようにポーションカットやスライスまでの加工をすることは出来ないが、ユーザーの一手間を省く、価格上昇を伴わない歩留まりの良い製品は、コスト削減に奔走する日本の特に加工業者にとって是有り難い存在となっている。



スカルネ社 TIF431 工場に併設されたメキシコ最大のフィードロット。10万頭の肉牛が約170日間穀物肥育される



HACCP 認定の最新鋭の食肉処理場。一日の処理能力は1,200頭分

また、今までは積極的に参入してこなかったチルドビーフを導入することにより、スーパーマーケット等の量販店への販売が急務となっている。そのためには、最終消費者に対するメキシコのイメージを高めるプロモーションも必要になってくる。

牛肉を取り巻く世界市場は流動的で、特に成長著しい新興国での消費が爆発的に増えている。オーストラリア産牛肉は中国でその存在感を高めると同時に、日本に対するオファー価格を高値維持している状態が続く。こうした中で、メキシコ産牛肉の日本市場における重要度も高まっているが、それも世界最大の消費国である中国次第の感がある。

中国の習近平主席が本年6月第1週にメキシコを訪問した際、メキシコ産牛肉に対する中国市場の開放を話し合ったものと見られる。6月第2週にはメキシコの農務大臣が食肉生産者を伴い中国を訪問しており、市場開放に向けて具体的に手続きを始めるものと推察される。

こうした状況の中、メキシコ産牛肉の日本における存在感を益々高めることができるかは輸出者、輸入者及びユーザーが一丸となって取組まなければならない課題である⁹。

(くまざき えいいち スカルネ・ジャパン (株) 代表取締役
<http://www.sukarneglobal.com/jp/>)

注記

1. USDA Foreign Agricultural Service, "Livestock and Poultry; World Markets and Trade
2. Promar 報告書
3. 現在はいくつかのヨーロッパ諸国も対日輸出を認可されている。
4. メキシコ中南部では小規模な牧草肥育、北部では第二次世界大戦後から穀物肥育が行われるようになった (Derrell S. Peel, Oklahoma State University, "The Mexican Cattle and Beef Industry: Demand, Production, and Trade, Western Economics Forum, Spring 2005) .
5. 米国産牛肉には脂肪の「さし」が比較的に入っている「チョイス」、「プライム」等のグレードがあるが、メキシコ産牛肉にはなく、またメキシコでは伝統的に「さし」の少ない赤身率が高い牛肉が好まれる。
6. 2007 年度に 3,000 トン、2008 年度に 4,000 トン、2009 年度から 2011 年度まで 6,000 トンの関税枠が設けられ、正肉で 38.5%の関税が 30.8%と 7.7%が割引された。2012 年度には 10,500 トン、2013 年度には 12,000 トンに拡大された。しかしながら、豚肉の対日輸出量を大きく上回る

関税枠と違い、牛肉は対日輸出量の一部を適用出来る量にしか過ぎない。

7. 近代的設備を誇る屠場で穀物肥育牛肉の生産が飛躍的に増大し、メキシコ国内より高値で取引される部位が米国及び日本へと輸出されるようになった。メキシコ国内では主に肩肉とも肉が好んで消費され、価格の高いロース部位 (リブロース、サーロイン、テンダーロイン) が主に米国に輸出される。日本には脂肪の割合が高いバラ肉 (ショートプレート、ブリスケット等) とタンやハラミ、ホルモンといった内臓肉が他市場より高値で輸出される。
8. メキシコ政府による食品展示会への参加補助、牛肉輸出協会設立など。また対日輸出認定工場が 04 年と比較すると倍以上の 43 工場に増えた。
9. 基準輸入価格以下で輸入される豚肉に対しその差額を関税として課税する制度。安い豚肉をスライスやポーショNCット等を行うことで付加価値が付き、基準輸入価格以上で輸入することで低関税率が適用される。

補論 食卓を彩るメキシコ産農畜水産食品

河嶋 正之

日本・メキシコ経済連携協定 (日墨 EPA) の 2005 年 4 月発効後 (12 年 4 月改正)、両国間の貿易と投資は順調に推移し、貿易総額^{注1}は 05 年の 156 億ドルから 12 年には 220 億ドルとなった。とくにメキシコ産農畜水産食品^{注2}の輸入は、日墨 EPA の関税割当制度 (IQ) の対象品目を中心に拡大している。

2012 年の日本のメキシコ産農水産食料品輸入の約半分を占める食肉のなかでも、牛肉が金額、数量ともに増加し日本の輸入市場におけるメキシコ牛肉のシェア^{注3}は 4.0% (20,479 トン、正肉ベース) となり、メキシコはオーストラリア、米国、ニュージーランドに次ぐ第 4 位の輸入相手国となった。本特集では、近年伸張著しいメキシコ牛肉の輸入に焦点を当てた。他方、業務用トンカツ食材としても輸入が多い豚肉はメキシコ産食肉輸入額の 70%を占めるが、シェアは 5.9% (45,636 トン)、順位は 4 位で米国、カナダ、デンマークに次ぐ。冷凍牛タンのシェアは 8.7% (1,377 トン)、順位は 4 位で米国、オーストラリア、ニュージーランドに次ぐ。鶏肉の輸入は 10 年から開始され、11 年には金額で前年比 3.4 倍 (121 万ドル)、数量で 3 倍 (377 トン) が輸入されたが、

12 年は輸入実績がない。

果実ではアボカドがシェア 89.8% (5 万 2,557^{トン}) で順位 1 位。メロン (ハニージュメロン) は減少したがシェア 66.6% (1 万 9,742^{トン}) で 1 位、マンゴーもシェア 39.3% (3,828^{トン}) で 1 位、ライムもシェア 99.9% (2,073^{トン}) で 1 位だった。このほかバナナ (5 位)、パイナップル (5 位)、レモン (3 位)、ブドウ (3 位)、イチゴ (2 位)、すいか (3 位) など輸入されている。

野菜類のうちかぼちゃ (生鮮) はシェア 43.6% (5,455 万^{トン})、順位はニュージーランドに次いで 2 位だった。因みにかぼちゃはメキシコ原産で、メキシコにとって日本は米国に次ぐ輸出相手国である。アスパラガス (生鮮) はシェア 58.2% (8,869^{トン}) で順位は 1 位、ブロッコリー (冷凍) はシェア 4.6% (1,660^{トン}) の 3 位で中国、エクアドルに次ぐ。ほかにレタス、チコリー、いんげんまめ、トマトなども輸入されている。

水産物は国際市況品で変動が激しく、12 年はエンセ

ナダ沖畜養くろまぐろも急減 (シェア 29.8%、1,282^{トン})、うに (生鮮・冷蔵) も微減 (シェア 0.8%、165^{トン})、いわし (冷凍) も半減 (シェア 31.0%、1,356^{トン}) したが、えび (冷凍) は増加 (シェア 0.4%、801^{トン}) した。

コーヒー (非焙煎) は産地の不作で前年比急減 (シェア 0.5%、1,798 万^{トン}、15 位) した。焙煎済コーヒーは 23 万^{トン}、14^{トン}と少ない。オレンジジュース (冷凍) はシェア 8.3% (3,306^{キロリットル})、順位は 3 位でブラジル、イスラエルに次ぐ。グレープフルーツ果汁はシェア 11.5% (2,163^{キロリットル})、順位はイスラエル、米国に次いで 3 位となった。このほかライムジュースも 8 万^{トン}、22^{キロリットル}が輸入され、順位は 3 位でイタリア、タイに次ぐ。他方、メキシコ特産のテキーラ・メスカルは 1,858^{キロリットル}が輸入され、日墨 EPA 発効前の 04 年比で金額 2.1 倍、数量 1.8 倍とほぼ倍増している。ビールのシェアは 15.4% (6,279^{キロリットル})、順位は韓国に次いで 2 位だった。

(かわしま まさゆき／ラテンアメリカ協会理事)

主なメキシコ産農畜水産食料品の輸入 (単位：100 万ドル、%)

品名	2010 年	2011 年	2012 年		
	金 額	金 額	金 額	構成比	伸び率
食肉	314.8	368.4	423.9	43.7	15.1
豚肉	246.0	274.1	301.6	31.1	10.0
牛肉	51.3	72.2	97.5	10.1	35.1
牛タン (冷凍)	8.5	10.9	11.5	1.2	5.8
果実・ナッツ	160.9	175.8	207.0	21.3	17.7
アボカド	108.8	114.6	142.9	14.7	24.7
メロン	20.1	26.4	24.3	2.5	△ 7.9
マンゴー	14.4	12.6	14.6	1.5	16.2
ライム	8.3	9.3	9.9	1.0	6.0
野菜	66.8	82.5	110.0	11.3	33.3
かぼちゃ (生鮮)	35.6	41.4	56.0	5.8	35.3
アスパラガス (生鮮)	21.4	31.9	45.0	4.6	41.1
ブロッコリー (冷凍)	3.7	3.8	3.4	0.4	△ 10.4
魚介類	46.7	115.1	61.0	6.3	△ 47.0
くろまぐろ	21.9	87.6	31.1	3.2	△ 64.5
うに (生鮮・冷蔵)	11.7	11.7	11.4	1.2	△ 2.2
いわし (冷凍)	3.3	2.7	1.2	0.1	△ 55.3
えび (冷凍)	6.8	8.0	10.4	1.1	30.0
コーヒー・茶・スパイス	11.2	25.3	9.4	1.0	△ 62.9
コーヒー (非焙煎)	10.7	24.5	9.0	0.9	△ 63.2
野菜・果実調製品	17.1	23.6	30.6	3.2	29.5
冷凍オレンジ果汁	9.5	14.3	12.8	1.3	△ 10.2
グレープフルーツ果汁	2.2	2.8	7.0	0.7	153.2
飲料、アルコール	21.8	23.4	25.5	2.6	8.9
テキーラ・メスカル	11.4	13.0	16.0	1.6	23.0
ビール	8.0	7.2	7.0	0.7	△ 2.8
その他	97.4	105.9	128.3	13.2	21.1
農水産・食料品合計	714.8	896.7	970.1	100.0	8.2

出所：ジェトロ中南米課提供 (財務省「貿易統計 (通関ベース)」)

注記

- (注 1) 貿易総額は両国の輸入通関額の和。輸出統計は第一仕向地計上原則であり、米国など第三国経由貿易の影響を排して実態に近づけるため、原産地計上原則の輸入統計で算出。
- (注 2) 関税割当制度 (IQ) の対象品は牛肉、豚肉、鶏肉、はちみつ、オレンジ、同果汁など 14 品目。詳細は農水省ウェブ「日メキシコ関税割当関係情報」参照。
- (注 3) 価格変動の影響を排除するため、全品目の輸入シェア、国別順位とも数量ベース。出所は農水省「農林水産物輸出入概況」、財務省「通関統計」など。
- (注 4) ドル建輸入額など各種統計値の入手については、ジェトロ中南米課および農林水産・食品調査課の協力を得た。記して感謝する。もとより誤りなどは筆者の責である。

パラグアイ産胡麻の生い立ち

白沢 寿一

胡麻は奈良時代に仏教伝来とともに渡来し、特に精進料理には欠かせない食材として利用されたとの文献が残されている。それ以来、胡麻油、すり胡麻、煎り胡麻、ペースト状にしたものをベースとし、多くの食卓胡麻製品が日本食にはなくてはならない食材として愛され続けている。

胡麻そのものの起源は、アフリカのサバンナで紀元前 3,000 年には登場したようで、クレオパトラの美貌はゴマ油の効用であったともいわれるくらい貴重品であったようだ。

これが、南方ルートでインド、ミャンマー等東南アジア方面に伝搬し、またシルクロード経由、中国、朝鮮、そして、日本にも伝わって来たといわれている。

胡麻の栽培そのものは、かなり難しい問題を含んでいる。まず気候的には亜熱帯でなければならず、そして何よりも問題なのは、機械化による大型の近代農法を取り入れられない厄介な作物であるため、結局人手による手間暇のかかる対応に加え、反収量が大変少ないことで、先進農業国の大規模農法には不向きであり、相手にされない産物なのである。

現在日本では、160 千トンを超える量（油用途で 60%、食品用途 40%）が消費されている。国産品は自家消費で、市場には出回らないため、100%近いものが輸入に依存しているのが実情である。

現在生産国としては、中国、インド、ミャンマー等のアジア諸国の大生産国に加え、アフリカ諸国、中米諸国が主要国である。ここ 10 数年来、我が社が普及させた南米パラグアイ産が日本の食品胡麻の原料としてなくてはならない立場になってきた。

特に、主要輸出国であった中国が、急速な経済発展の結果、国民の食生活の向上にともない、かつての輸出国から今や最大の輸入国に転じたことから、世界の胡麻市場における需給バランスに大変なインパクトを与え、輸入サイドに与えるプレッシャーは想像を上回って白熱化しており、これは供給国の一翼を担う我々にとっても、産地での原料確保に熾烈な戦いを余儀なくされている。

パラグアイの胡麻が世界の市場に登場したのは、そ

んなに古い話ではない。しかし今日、日本の食品胡麻市場においてパラグアイの供給状況が与える影響は大きいものがあるところまで成長した。

南米大陸の中央部、南米のへそとも心臓ともいわれるパラグアイは、面積が日本の約 1.1 倍で、ほとんどが平坦な国土。そこに人口は 650 万人という - 密度の低い国家で、環境汚染を排出するような重工業生産施設、石油化学工場もなく、大地の自然とともに生活する牧歌的な環境のなか、主な産業は大豆、とうもろこし、小麦、米、綿花、牧畜などを主とした農牧業である。農村部では 20 万家族以上が生活の基本的ニーズを満たすための金銭収入がないというのが実情で、それらの多くは、耕作面積 3～5 ヘクタールを所有する小農といわれる農家が占めており、生活は自給自足の域を出ない状態なのである。

我々はパラグアイの亜熱帯の気候風土、農村の貧困の実態、豊富な労働力に注目し、この自然環境、化学肥料使わず農薬汚染の無い健康食品として胡麻生産を、この小農家達に託することにより、彼らに現金収入の道を開き、生活を向上させることによって、パラグアイ経済の底上げを図ることが出来、同時に世界的に伸び悩む胡麻の生産量に寄与し、日本を中心に輸入国のエコフーズ要望に応えられるとの確信のもと、細かい取り組み方針を確立、白沢商工（株）として試験栽培に取り掛かったのが 1989 年であった。

本社敷地内の試験圃場での胡麻の試験栽培から始まり、自家農場にても種子確保の試験を重ね、3 年後の



胡麻栽培普及のための指導会合

92年に本格的に農家に種子を配布するまでに至った。しかし、彼ら農民にとって胡麻という新しい作物に対する知識はまったく持ち合わせていなかったため、とにかくゴマの特性を説くことから始め、彼らへの指導は試行錯誤の連続であった。

幸いパラグアイには、36年ラ・コルメーナの地に日本人移住の第一歩が始まり、その後戦後の日本人移住者達が、道路、学校、医療機関というインフラのない原野に入植し、艱難辛苦の努力の結果今やあらゆる分野で活躍し、社会貢献を果たしている実績をパラグアイ官民ともに評価し、好感を持ってくれている土壌が根底にあったので 胡麻取り組みにも追い風で迎えてくれた。

パラグアイは、スペイン語と原住民の言語グアラニー語の双方を公用語として採用しており、都市部の住民はスペイン語、農村部の住民はグアラニー語で占められているため、農民を指導する上でグアラニー語を解しないと意思の疎通が図れないと同時に、仲間意識を持ってもらえず、グアラニー語を駆使する大学農学部教授や農業技師などを雇い、毎週2〜3回各地区の周辺農家の人達を野外の広場に集合させて、オリエンテーリング、作付け、成長期の管理、収穫、納入の方法等々の基礎的教育、時には1カ月以上も農業技師

を現地に滞在させ、農民の目線で普及を図った。

そして、1992年、パラグアイ産胡麻収穫量約20トンをもって日本への輸出が始まった記念すべき年となった。弊社は、パラグアイ産品である落花生などを通じ、日本の商社、食品メーカーとの付き合いを70年後半から続けていたので、胡麻納入は比較的順調に開けて行った。

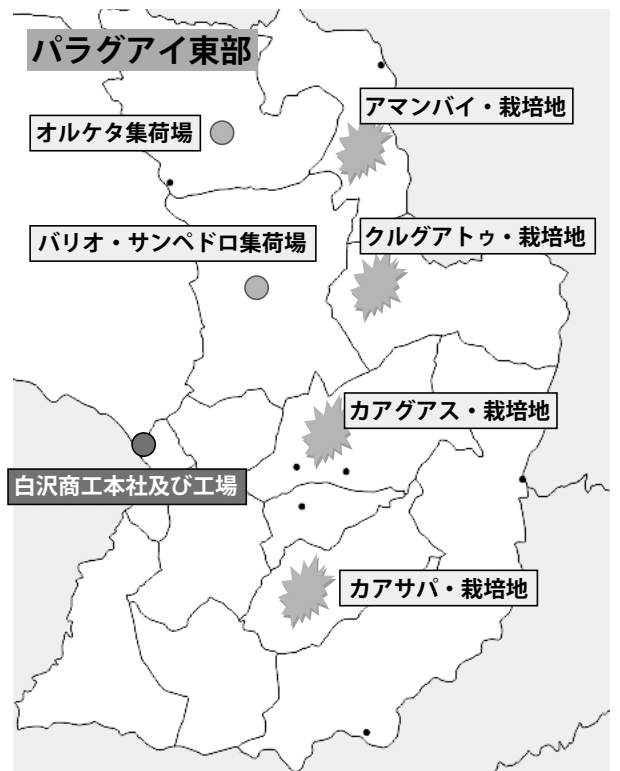
本社工場に納入された胡麻は温度、湿度がコントロール出来る空調設備を具備したサイロ(6,500トン収蔵)にいったん受け入れ、これを世界最高純度99.99%に仕上げるプロセスを通過する過程で、雑草の種、砂、虫糞、虫卵、埃、変色胡麻、すべてが最先端技術で作られたカメラ付き色彩選別で除去する。製品となったものを保存庫(1,000トン収蔵)で出荷を待つ。本社工場



セントラル県リンピオ市近郊の本社工場



白沢商工の本社、集荷場、栽培地





開花期の胡麻畑



胡麻の生長のための手作業の除草



畑で脱穀中の胡麻



刈り取り後乾燥用ボッチ作り

では ISO9001 の認定も取得し、品質重視の日本市場に合わせるべく万全の態勢を整えている。すなわち優良種子の配布、輸入国で許可されていない農薬の不使用、手作業による除草、農家にての荒選、集荷地倉庫における第一次選別、本社工場での最終選別という3重に及ぶ選別工程を経過する。これだけのインフラを持って万全を期しても、収穫最盛期には動きが集中するので、納入トラックが受け入れ待ちになったり、製品出荷時における空きコンテナ不足、長期の旱魃で河の水位が下がり、運行が半減し出荷体制に支障が出たり悩みは尽きない。

内陸国パラグアイにおける物流システムは、下記のようなになる。

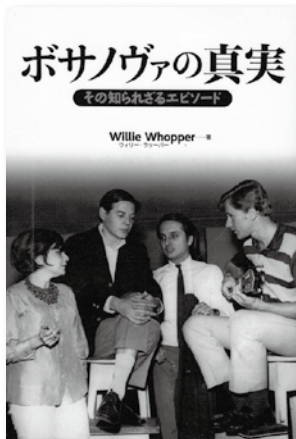
コンテナに積まれた製品は、国の中央部を南下するラプラタ河上流であるパラグアイ川岸の首都アスンシオンや近郊の港で河船にのせ、アルゼンチンのブエノスアイレス港まで運ばれ、本船に積み替え出荷される。工場から河船、そして海洋本船へのスムーズな連携が求められるが、各機能の能力に限界があり、これをうまくセッティングするのが物流担当の腕の見せ所である。

胡麻生産開始から今年で20年、生産農家約4万戸、栽培面積約6万町歩に達している。その生産量のほとんどが日本市場へ輸出されている。食品白胡麻消費者の3人に2人はパラグアイ産の胡麻を食していることになる。

パラグアイ胡麻がここまで成長した背景に、小農家をはじめ、関係団体、パラグアイ政府が、我が社に対し“井戸を掘った”先駆者として受け止めてくれていることに加え、創業以来、産地に溶け込み、長年にわたり小農家の貧困対策解決に取り組んできた実績、困難がともなう胡麻生産と一緒に戦ってきた仲間意識が信頼に繋がっているのではないかと自負している。

パラグアイは、官民ともに大変な親日国である。昭和天皇崩御の折は、時の大統領令で国家を挙げて喪に服してくれた程で、我々もこの地で活動している立場として、国の発展とさらなる貧困対策に取り組み、日本・パラグアイ両国の架け橋となる仕事に貢献出来ていることに誇りを持ち、努力を続けていく所存である。

(しろさわ としかず 白沢商工(株) 代表取締役社長、
在パラグアイ共和国)



ボサノヴァの真実 ―その知られざるエピソード

ウィリー・ラウパー 彩流社 2013年2月 462頁 3,000円+税

いまや日本でもあちこちで、ブラジルとは無関係の思いがけないところでも流されているボサノヴァは、実はブラジル庶民の伝統的な音楽ではなく、1958年に創られたといわれる。リオデジャネイロの中産階級の音楽家の間から生まれ、ブラジル各地の音楽や米国でジャズやラテン音楽などの影響を受け、盛衰の歴史を超えて半世紀を経た現在、ボサノヴァはいまや世界的な市民権を得て多くのファンがいる。

本書はボサノヴァに魅せられブラジル音楽評論の道に入って10余年の著者が、ある程度はボサノヴァについての認識を持っている読者に、あらためて「ボサノヴァはブラジルの音楽である」という原点に立って“ブラジルからの視点”でボサノヴァの生まれた背景、定義、分類を詳述し、トム・ジョビン、ジョアン・ジルベルト、ヴィニシウス・ヂ・モライスの3人の出会いがボサノヴァを誕生させたという通説に対する見解をはじめ、有名のみならず無名でも評価すべきボサノヴィスタたちの活動、米国はじめ海外に渡ったボサノヴァの作曲家、演奏家、歌手たちとブラジルとの往来、世界に広がったボサノヴァ（中にはブラジル人が知らないボサノヴァのスタンダード曲もあるという）、ボサノヴァをはじめいろいろなジャンルの音楽を融合するMPB（ブラジル・ポピュラー音楽）の中に昇華されていること、1964年の軍政の始まった前後と時を同じくしていったん衰退したボサノヴァが70年代後半に復活し、今日に至り活躍している現役、直系、継承者やブラジル国外で活躍しているミュージシャンたち、ボサノヴァの新解釈、他ジャンルとの融合の試みにまで言及している。最後に日本におけるボサノヴァの歴史を、60年フランス、ブラジル、イタリア合作映画『黒いオルフェ』の挿入歌「カルナバルの朝」「フェリシダーヂ」の大ヒットでボサノヴァが知られるようになり、ブラジルからのミュージシャンの来日、渡辺貞夫をはじめ自身のジャズ等にボサノヴァを取り入れ始める日本人ミュージシャンが出始めた黎明期、本格的にブラジル・日本のボサノヴァ・ミュージシャンが往来するようになった70年代の普及期、アントニオ・カルロス・ジョビンの最初で最後の来日公演や小野リサのデビューに象徴される80年代の発展期、シュハスカリア（ブラジル風焼き肉レストラン）の開店が相次ぎ、サッカー等を通じてブラジルへの関心が広まって、ブラジルのボサノヴァ・ミュージシャンの来訪や日本人ミュージシャンのブラジル渡航が盛んになった90年代の多様期、ジョアン・ジルベルトの来日公演、ブラジルでボサノヴァの後継者と評価されるまでに認められている臼田道成をはじめ、小野リサ以外にも多くの実力あるボサノヴァ・ミュージシャンが輩出し、さまざまな店でBGMで流されるようになった円熟期の2000年代に至るまで、日本でのボサノヴァの流れを概観している。

全編にわたってボサノヴァについての実に豊富かつ様々な事象の蘊蓄が満載されていて、ボサノヴァの全容を知るうえで貴重な文献だが、それと同時にブラジルをボサノヴァを通じて理解するためにもきわめて有用な手引き書である。

〔桜井 敏浩〕

フランシスコ新法王登場の歴史的意味

上野 景文

史上初のラテンアメリカ（以下、中南米）出身者、史上初のイエズス会士として、3月に就任した第266代ローマ法王フランシスコは、僅か3か月の間に、バチカン、カトリック世界の常識を次々と打ち破り、多くの新風を吹き込み、いまやカトリック世界の潮流が変わるとの予感すら与えている。本稿では、カトリック人口の4割を擁する中南米から初めて法王が出たこと、並びに、初めてイエズス会出身者が法王となったことの意味を考察する（注1）。

はじめに：中南米諸国の反応

中南米諸国は、大まかに言って、コンクラーベの結果を「意外」としつつも、「熱い思い」で受けとめ、これを「歓迎」した。

特に各国のメディアは、法王誕生を大々的に取り上げ、多くの国で、特集記事、特番が組まれたが、このことは、中南米地域の人々の「特別の思い」を端的に表象したものと言えよう。ただ例外はある。お膝元のブエノスアイレスで、一部メディア、端的に言えば、政府系メディアの反応は当初冷やかだった。これは、フェルナンデス政権とベルゴリオ枢機卿の「冷たい関係」を反映したものだったが、大多数の国民、主要メディアが熱烈に歓迎したことに押され、政権側は、その後路線を変更し、法王への接近に努めている。

各国での熱い歓迎の裏には、中南米のことを熟知した人物が法王になることにより、バチカンの視線が中南米に向けられることになるだろうとの期待（これまでバチカンは自分達に相応の注意を払って来なかったのではとの疑念）や、庶民に溶け込む人柄で一貫して貧しい人々に寄り添って来た新法王に、今後中南米における格差是正の面で影響力を行使して欲しいとの期待が、読み取れる。

なお、各国が当初、ベルゴリオ選出を「意外だ」と受け止めたのは、「今回も欧州人が選出され、中南米人は外されるだろう」、「中南米人から選ばれる場合でも、

バチカン経験者からだろう」と言う思い込みがあったためだ。バチカン色の希薄なベルゴリオの選出は、中南米でも意外だったということだ。

イエズス会士が法王になったことの意味

(1) 「前線文化」の持ち込み

イエズス会士としてのベルゴリオ枢機卿は、ブエノスアイレスにあって、清貧、謙虚、献身を旨とする修道士特有の「前線文化」を一身に体現した人物で、王朝風のバチカン「中枢文化」とは対極に位置する。カトリック世界には、このような「非バチカンの」人物であれば、新風を吹き込んでくれるとの判断があったと解釈出来よう。新法王は、バチカンに移ってから、*「質素な教会(a poor church for the poor)」*実現を期し、質素、謙遜を身上とするこれまでの姿勢を愚直なまでに貫いている。すなわち、就任行事簡素化、法王指輪・装束の質素化、一般宿舎での生活開始、法王離宮の使用見合わせなどを通じ、「前線文化」を吹きこみ、王朝風文化に風穴を開けつつある。このような新法王の行動は、大衆への直接的語りかけを好む気さくな人柄とも相俟って、カトリック世界内外で共感を呼んでおり、エネルギーを感じると言う人が増えている。とは言え、この新風がバチカンの体質を変容させるところまでゆくか、なお定かではなく、今後を見守る必要がある。

(2) 貧しい人に寄り添う姿勢

次いで、宗教の社会的役割と言う観点から論じる。イエズス会士ベルゴリオは、貧しい人たちに寄り添う姿勢を貫いて来たことでも知られるが、法王就任後も、その姿勢を堅持している。すなわち、5月下旬には、「拝金のカルト」を放逐することで貧しい人たちを助けよと各国指導者に訴え、次いで、6月上旬の「世界環境の日」には、飽食は貧しい人たちから（食べ物）を「盗む」に等しいとして、使い捨てや無駄の文化を厳しく批判した。

このベルゴリオ司教（当時）が20～30年前にアルゼンチンから日本に派遣した神父のひとり、プエノスアイレスの神学校時代に同司教から、「学校で祈っているだけでは駄目だ。1週間のうち1、2日は、貧しい人たちの多い地域に飛び込んで、かれらと同じ目線に立って交われ」、「かれらを尊敬せよ」、「彼らから学べ」と説かれたと述懐する。教会の社会的役割を説く点で、当時から「筋金入り」だった訳だ。

なお、貧富の差が著しい中南米では、1960年代半ば以降、「教会は傍観者であってはならない」、「教会は貧者の側に立って活動するべし」（63年、第2回ラテンアメリカ司教会議（CELAM））との認識を打ち出し、これをG.グティエレス神父が「解放の神学」として結実した。中南米ならではの神学の出現だ。この神学を母体とする運動は、その後ブラジル、ニカラグアなどで政治運動として結実したが、エルサルバドル、メキシコなどでは、イエズス会士を含む多くの司祭が殺害された（法王フランシスコはこれら犠牲者を順次顕彰してゆくものと思われる）。

今日では政治運動は終息したが、この神学の流れを汲む聖職者はいまなお少なく、そのエートスは地域全体で広く共有されている。かれらは、貧しい人に寄り添う新法王の姿勢を「自分達と近い」と感じているが、政治的活動に批判的だったベルゴリオ自身は解放神学者とは一線を画して来た。それは運動論、方法論の違いであり、思想の基盤は共通すると見る。

(3) 「壁」を嫌う新法王

他の宗派、宗教との関係については、5月22日に新法王は、「カトリック教徒であるか、ないかに関わらず、神の救いは全ての人を対象とする」、「（その対象には）無神論者すら含まれる」と発言して、注目された。善行を重ねることで、宗教の違いを超えて、救いの道は開かれるとの趣旨だ。右の点は、マルコによる福音書で2000年前に説かれ、半世紀前の第2バチカン公会議で確認されていることから、特に目新しいものではない。

にもかかわらず、何処か新味を感じさせるものがある。法王は同日、「人々の間に壁を立てるな」とも語ったが、このひと言こそが法王の思想の核心を突くものなのだ。すなわち、これまでバチカン幹部の口からは、ともすれば、「カトリックだけは特別だ。他の宗派、宗教は2流だ」との前提に立った発言が聞かれた。この「壁の文化（exclusionism）」に対し、「宗教の壁を越え

て、全ての人を取り込もう」と言う法王は、「壁なし文化（inclusionism）」の提唱者なのである（注2）。

50年前の第2バチカン公会議を経てオープンになったとされるバチカンであるが、この数十年再保守化が進行し、閉鎖的になったと見る人が多い。inclusionismが後退し、exclusionismが強まったということだ。inclusionism志向の法王がバチカンに乗り込んだことの意味は少なくない。バチカンを再オープン化するためには、第3公会議をとの声が聞かれる中、新法王がどう舵取りしてゆくか、目が離せない。

中南米出身者が法王になったことの意味

(1) グローバルな意味

「今回中南米人が初めて法王に選出された」ことは、どれほどの意味を持つのだろうか。世界のカトリック人口の4割を占める中南米から法王が選ばれたことは、何ら不思議ではない。にもかかわらず、歴代法王は欧州人が何世紀にもわたり独占して来た。それは、バチカンでは「欧州中心主義」が強固だったからである。では、今回の中南米人選出をきっかけに、バチカンの「欧州中心主義」が切り崩され、その体質が変わることになるのか？ 今後、中南米を含む非欧州勢の発言力が高まることになるのか？ カトリック世界の「重心」が、欧州から「南」、ひいては「世界」にシフトし、「脱欧州化」は本格化するのか？

この欧州中心主義を改めるためには、人事面の欧州人優遇を是正することが先決だ。バチカンの人事の中で、最も重要なものは、コンクラーベでの投票権を有する枢機卿の任命だ。実態とは言えば、中南米は世界のカトリック教徒の4割を占めながら、枢機卿は16%に過ぎない。これに対し、全教徒の1/4を占めるに過ぎない欧州は枢機卿の5割強を占めている。この著しい格差が欧州優遇を生じている訳だ。

この構造を改め、各大陸の実勢、実情を反映した「より多元的なバチカン」を構築することにより、カトリック教会を真に「グローバルな存在」に脱皮させることこそが、新法王に課せられた歴史的使命なのだ（注3）。そのような過程を通じ、将来アジア、アフリカから法王が選出されることも可能となろう。ただ、中南米、アジアなど非欧州出身の枢機卿の比率を高め、欧州偏重の現状を是正せんとすれば、欧州勢の抵抗に会うことは必至であり、予断を許さぬものがある。

(2) 中南米にとっての意味

先ずは、バチカン幹部への中南米人の登用が増えると言ったことが考えられるが、此处では政治的な意味に絞って述べる。先ず中南米における教会の立ち位置について見ておこう。中南米では、メキシコのような例外を別とすれば、欧米流の政教分離は実現しておらず、カトリック教会は無視し得ぬ政治的影響力を有している。教会は今日なお政治的プレーヤーなのだ。多くの国で、教会はその気になれば影響を行使し得る能力を有する。もっとも、今日の教会は、政治的言動については格段に慎重になっており、近年に限って言えば、民主主義、人権、或いは、社会的公正の擁護者としての立場に特化しつつある。

法王フランシスコの登場は、中南米の教会が進めたい民主化、人権擁護、社会の不公正や格差是正などの関心事項に関し、ローマから「援護射撃」が得やすくなること意味する。今後、各国教会とバチカンの連携は、中南米の事情に通じた法王の登場で、活性化されるであろう。そこで特に注目したいのは、ベネズエラ、アルゼンチンをはじめとする権威主義的ポピュリズム政権が、時として現地教会と摩擦を生じている点だ。新法王は、国名は控えるにせよ、これら政権の強権主義、反民主的行動を批判することで、現地教会と連携するものと見る（注4）。

以上要約すれば、中南米出身の法王の登場で、バチカン、カトリック世界における中南米へのアテンションが増大し、中南米の発言力が強まり、バチカンと現地の連連携プレーが増え、もって、バチカンと中南米の距離は縮まる、ということである。

まとめ

新法王は、既にして、バチカンに新風を吹かせ、カトリック世界内外で好感されている。今後、新法王が、バチカンと各大陸、バチカンと前線の距離を縮め、もって、カトリック世界の歴史的転換を進めることになるか、興味は尽きない。欧州勢やバチカン官僚による抵抗は手ごわいであろう。が、「専制君主」として、法王フランシスコは歴史を動かし得る立場にある（2013年6月18日記）。

参考：『バチカンの聖と俗（日本大使の一四〇〇日）』

（上野景文、かまくら春秋社 2011年）

（注1）新法王が直面する課題には、この他に、性的虐待問題

など一連のスキャンダルからカトリック組織を立て直すこと、一般社会の常識と教会の教えの乖離にどう取り組むか、などの重要問題がある〔拙論「新ローマ法王フランシスコの船出」(5-09、霞関会HP；<http://www.kasumigasekikai.or.jp/cn3/jijicolumn.html>) 参照〕。

（注2）この考え方は、イエズス会の進歩派がかねてより唱導する多元的宗教論にも通じるところがある。振り返るに13年前、ヒンズーなど諸宗教の価値を正当に認めるべきだとの主張を盛り込んだイエズス会士デュブイ神父の出版を巡り、バチカンの教理省がこれを処分すると言い出した。審理では、イエズス会のコルベンバッハ総会長（当時）が弁護に廻り、大論戦が展開されたが、イエズス会側の鋭い舌鋒の前に、教理省は擁護論を切り崩すことが出来なかった。この論戦、まさに「exclusionism 対 inclusionism」の対決であった。

（注3）欧州中心主義を体現していると目された前法王ベネディクト16世は8年の治世の間アジア訪問を果たさず、また、日本ではこの3年間枢機卿不在の状態が放置されてきている。青年時代に日本に赴任することを志願したことがある新法王（健康上の理由から実現しなかったが）には、日本を含むアジアを重視した取り組みを期待したい。同時に、日本のカトリック教会には、新法王訪日を期しての働きかけを期待したい。

（注4）2009年に、ベネズエラのチャベス大統領に接近したホンジュラスのサラヤ大統領が国外追放される無血クーデターがあった。多くの米州諸国はこれを非難し、大統領の復位を求めたが結局復位は実現せず、クーデター派は目的を果たした。この時、テグシガルパのロドリゲス枢機卿は、国際世論の批判を浴びていた暫定政権を擁護し続け、クーデター派の目的達成を支援した。バチカンもその間、暫定政権非難を一切控えることで結果的にこれを擁護した。バチカンがポピュリズム政権にどう対応したかを知る好材料であり、中南米における教会の実力と、バチカンと現地教会の連携を看取ることの出来る事案であった。

（うえの かげふみ 杏林大学外国語学部客員教授、
前駐バチカン大使）

パラグアイにおけるコロラド党の政権奪還 —2013 年大統領選挙分析

磯田 沙織

はじめに

パラグアイにおいて、2013 年 4 月 21 日に大統領選挙¹が実施され、08 年の大統領選挙で敗北した ANR (コロラド党、正式名称は「国民共和協会」) が、5 年振りに政権を奪還した。

ANR は、08 年まで 61 年間政権を担ってきた。しかし、08 年、① ANR 内部の分裂、②長期間政権を握ってきた ANR に対する国民からの批判、③最大野党の PLRA (リベラル党、正式名称は「真正急進自由党」) による、元カトリック司教のフェルナンド・ルゴの擁立が重なり、PLRA と左派諸派の選挙同盟に敗北するという苦い経験をした。これは、伝統的に保守勢力が強く、特に保守系の ANR が勝利し続けてきたパラグアイの選挙史にとって、異例の結果であった。

08 年と比較して、今回の選挙では、① ANR の団結、②弾劾に追い込まれたルゴや、その後政権を担った PLRA に対する国民からの批判、③ ANR の組織力の強さや、ANR の大統領候補が持つ豊富な資金力という観点から注目された。

また、左派勢力が極めて弱いという特徴を持つパラグアイ政治において、左派勢力がどの程度票を伸ばすかも注目された。



当選後、次期副大統領のアファラ (右) とともに、支持者に挨拶するカルテス (左)

(出典: abc color, 21 de abril, 2013. <http://www.abc.com.py/nacionales/partido-colorado-vuelve-al-poder-con-cartes-563578.html>)

さらに 12 年 6 月、ルゴが議会において弾劾された後、メルコスールや UNASUR は、パラグアイにおいて民主的秩序が回復するまで、パラグアイの関連会合への参加権を一時停止した。このため、メルコスールや UNASUR との関係修復に向けた選挙という点でも重要であり、周辺国との関係を修復し、地域連合に復帰するためには、民主的な選挙の実施が不可欠であった。以上の観点から、本稿では、今回の大統領選挙の分析を試みる²。

選挙結果

(1) ANR の勝利 (表 1 参照)³

大統領選挙では、ANR の候補として史上最多の約 110 万票 (全体の 45.8%) を獲得したオラシオ・カルテスが勝利した。これは、① ANR の団結による組織票、②無党派層や ANR 支持者以外の票の獲得、③カルテス自身の資金力によるところが大きかった。

まず、ANR は、党の団結をアピールした。大統領候補への出馬を検討していた党首のリリアン・サマニエゴは、筆頭上院議員候補となることを条件に、カルテス支持に回った。また、党内選挙におけるカルテスの対立候補であった、元アルト・パラナ県エステ市長の

表 1 2008 年・2013 年の大統領・副大統領結果

大統領・副大統領	2013 年		2008 年	
	得票数	割合	得票数	割合
ANR (コロラド党)	1,104,169	45.8%	573,995	30.6%
PLRA (リベラル党)	889,451	36.9%	766,502	40.9%
AP (前進する国家連合)	141,716	5.9%	-	-
FG (左派連合)	79,573	3.3%	-	-
PPQ (愛国党)	27,026	1.1%	44,060	2.4%
UNACE (倫理的市民の国民連合)	19,416	0.8%	411,034	21.9%
白票・無効票	131,703	5.5%	66,303	3.5%
その他	16,383	0.7%	12,233	0.7%
計	2,409,437	100.0%	1,874,127	100.0%

(出典: 最高選挙裁判所)

(注: 2008 年、PLRA と FG は選挙同盟を組んだ。)

ハビエル・サカリアス・イルンは、党内選挙後、自身の敗北を認め、カルテスに協力すると公言した。ANR は、強い組織力を生かして党員の票を固めることで、カルテスに有利となった。

次にイメージ戦略によって、ANR は、党の刷新をアピールし、ANR 支持者以外からの支持も取り込んだ。2008 年選挙の際、長期間にわたって政権の座にあった ANR は、汚職問題を中心とした批判を受け、その批判が、対立候補のルゴに有利に働いた。このため、ANR は、いつも同じ顔ぶれの、汚職にまみれた古い政党というイメージを刷新する必要があった。そこで、カルテスは、選挙戦において、「パラグアイのための新しい方向 (Un Nuevo Rumbo para el Paraguay) !」というキャッチフレーズを繰り返し、新しい ANR をアピールした。その結果、2009 年に ANR の党員になったばかりで、企業家出身のカルテスは、旧来の ANR のイメージを払拭することができ、無党派層の票を取り込むことにも成功した。

最後に、カルテスの豊富な資金力が、選挙戦において有利に働いた。国家予算を用いた公共事業の実施によって有権者にアピールできた PLRA とは異なり、ANR には、選挙資金が必要であった。カルテス・グループを率いるカルテスは、国内でも有数の企業家であり、潤沢な資金を有していたことから、この資金を活用し、ANR は有利に選挙戦を進めることができた⁴。

他方カルテスの対立候補であった、PLRA の元公共事業通信相のエフライン・アレグレは、政権政党としての強みや他の政党との選挙協力を生かすことができず、約 89 万票（全体の 36.9%）で敗北した。アレ

グレは、小規模政党である PDP（進歩民主党）、PEN（国民会合党）と選挙同盟を結んだが、ANR の組織力には太刀打ちできなかった。また、起死回生を図って、創設者であり、党首のリノ・オビエドが死去したばかりの UNACE（倫理的市民の国民連合）から選挙協力を得ると発表した。UNACE はもともと ANR 内部の派閥が独立した政党であったため、UNACE 党員・支持者の協力はあまり得られなかった⁵。それどころか、UNACE から選挙協力を得るために実施した、UNACE 党員の親族の会社と農村土地開発院 (Indert) が関与する土地の売買に対して、有権者から汚職疑惑を持たれ、無党派層からの支持を取り込むことにも失敗した。さらに 08 年同様、左派勢力との選挙協力を模索したものの、ルゴの弾劾に賛成した経緯から、左派勢力との選挙協力には至らなかった。

また大統領候補を選出する過程で分裂した左派勢力は、カルテスとアレグレに大きく引き離された。08 年大統領選挙の際には、選挙史上初めて主役の座に躍り出た左派勢力であったが、13 年大統領選挙では、従来どおり脇役に回った。08 年大統領選挙の際には、元カトリック司教のルゴを大統領候補に擁立することで、カトリック教徒の多いパラグアイにおいて有利に選挙戦を進めたが、今回は、もともと基盤の脆弱な左派勢力が分裂したことにより、票を伸ばすことができなかった。その中でも、左派の AP（前進する国家連合）のマリオ・フェレイロは、テレビの司会者として知名度が高かったことから、カルテス、アレグレに次ぐ約 14 万票（全体の 5.9%）を獲得することができたが、両者に大きく引き離される結果となった。

表 2 2008 年・2013 年の上院議員選挙結果

上院議員	2013 年			2008 年		
	得票数	割合	議席数	得票数	割合	議席数
ANR	865,206	35.9%	19	509,907	27.2%	15
PLRA	588,054	24.4%	13	507,413	27.1%	14
FG	238,313	9.9%	5	135,590	7.2%	2
PDP (進歩民主党)	144,691	6.0%	3	38,402	2.1%	1
AP	117,056	4.9%	2	-	-	-
UNACE	90,640	3.8%	2	336,763	18.0%	9
PEN (国民会合党)	78,460	3.3%	1	20,843	1.1%	0
PPQ	45,168	1.9%	0	151,991	8.1%	4
白票・無効票	159,889	6.6%	-	118,257	6.3%	-
その他	79,689	3.3%	-	53,394	2.9%	-
計	2,407,166	100.0%	45	1,872,560	100.0%	45

(出典：最高選挙裁判所)

(注：2013 年、FG は、元大統領のルゴを筆頭上院議員候補に、ルゴ政権下の閣僚等、知名度の高い人物を上院議員候補にそれぞれ擁立し、議席数を 5 議席に伸ばした。)

表 3 2008 年・2013 年の下院議員選挙結果

下院議員	2013 年			2008 年		
	得票数	割合	議席数	得票数	割合	議席数
ANR	919,625	38.3%	44	582,932	31.1%	30
PLRA	656,301	27.4%	27	500,040	26.7%	29
UNACE	147,534	6.1%	2	330,754	17.7%	15
FG	122,440	5.1%	1	106,127	5.7%	1
PEN	108,662	4.5%	2	14,227	0.8%	0
AP	84,826	3.5%	2	-	-	-
PPQ	63,662	2.7%	1	102,139	5.5%	4
PDP	30,579	1.3%	0	29,980	1.6%	1
白票・無効票	155,905	6.5%	-	103,941	5.6%	-
その他	110,092	4.6%	1	102,523	5.5%	-
計	2,399,626	100.0%	80	1,872,663	100.0%	80

(出典：最高選挙裁判所)

(注：下院議員は 17 ブロック毎に選出されるため、全体の得票数と議席数が必ずしも一致しない。例えば、2013 年の FG の場合、一つのブロックにおける得票数は多かったが、他のブロックでは得票数を伸ばせなかったことから、1 議席しか得られなかった。)

(2) カルテス新政権の議会運営（上下両院議員選挙の結果：表2・3参照）

ANRは、下院で過半数を獲得することができたが、上院では第1党となったものの、過半数の獲得には至らなかった。このため、上院において、他党から協力を得る必要がある。

上院では、PLRAが引き続き第2党になったが、FG（左派連合）が5議席と第3党へ躍進し、FGから分裂したAPが獲得した2議席を合わせると、左派勢力が7議席を占めることとなった。これは、ルゴ政権下において、左派の支持者が増え、左派勢力が少しずつ台頭し始めた証とも言える。大統領選挙では、二大政党に大きく水を空けられた左派勢力であるが、今後、上院における第3党という立場を生かして、カルテスの議会運営に影響を与える可能性が高い。

今回の選挙が持つ意義

(1) パラグアイの政治=保守の牙城

パラグアイの伝統的な二大政党であるANRとPLRAは、保守系であり、パラグアイは保守の牙城と呼ばれる程、保守勢力が強い⁶。その中でも、ストロエスネル独裁政権時代を含め、長期間与党であったANRの勢力は極めて強く、ANRの組織力は他の政党を圧倒している。

しかし、民主化以降のパラグアイ政治は、ANRによる内部対立の歴史でもあった。1998年に誕生したクバス政権では、派閥対立が副大統領の暗殺へと発展し、この暗殺に関わったと疑われたクバスが任期を全うすることなく、辞任を余儀なくされた。2003年に大統領に就任したドゥアルテは、自身の後継者争いを引き起こした結果、党内の内部分裂が深刻となり、08年の歴史的な敗北へとつながった。この中で、組織票を手堅く固め、無党派層の支持も獲得することができたカルテスの手腕が、ANRの政権奪還へ貢献したことを印象づけた選挙であった。

(2) 地域連合との関係修復

選挙監視団を送り込んだUNASURは、パラグアイにおいて、組織的な不正等が観察されず、民主的な選挙が実施されたと発表した。今後、この発表を根拠として、パラグアイにおいて民主的な秩序が回復したと判断され、メルコスールやUNASURへの復帰が正式に決定されるか、争点となるであろう。

しかし、メルコスールに復帰するための最大の問題は、ベネズエラの扱いである。パラグアイの議会は、

ベネズエラの正式加盟に関する議定書を承認しなかったため、ベネズエラはメルコスールに加盟できなかった。そこで、パラグアイが参加権を停止されたことを利用して、メルコスールは、ベネズエラの正式加盟を決定した。このため、パラグアイ国内には、ベネズエラの加盟に抵抗感を持つ政治家が多数存在する。しかし、パラグアイは、全体の輸出額の55%、輸入額の41%をメルコスールに頼っており、経済面から、メルコスールへの復帰は不可欠である⁷。

おわりに

今回の総選挙により、ANRは政権を奪還した。しかし、ポスト争いによって再び内部対立を引き起こす可能性があり、カルテスが、党内の古参の政治家を束ねながら、いかにして政権運営を行っていくのが課題となる。また、メルコスールやUNASURとの関係修復も注目されている。しかし、パラグアイ議会が、メルコスールに加盟したベネズエラをどう扱うのが課題となるであろう。

今後、政治経験のないカルテスが、上記の課題に対応し、自身の公約である「透明性のある効率的な政治運営」をいかにして進められるか、その政治手腕が注目される。

（本稿は、著者個人の見解に基づくものであり、外務省並びに在パラグアイ日本国大使館の立場や見解とは一切関係ない。）

（いそだ さおり 在パラグアイ日本国大使館 専門調査員）

（注）

1 パラグアイでは、5年ごとに、大統領・副大統領選挙、上下両院議員選挙、17県の県知事選挙、県議会議員選挙、メルコスール議会議員選挙を同日に実施する。この内、大統領・副大統領、県知事は再選が禁止されている。上下両院議員選挙は拘束名簿方式であり、上院議員選挙は全国区の比例代表制、下院議員選挙は17ブロック毎の比例代表制である。

2 本稿は、5月末日までの公開情報に基づいて構成されている。

3 中央政府同様、地方政府においても、ANRは圧勝した。17県の内、12県でANRの候補が県知事に選出され、県議会228議席中123議席をANRが獲得した。また、メルコスール議会18議席中10議席もANRが獲得した。

4 2010年に行われた首都アスンシオン市長選挙においても、カルテスが持つ資金の恩恵を受けて、党首のサマニエゴの弟が市長に当選した。

5 UNACEは、1996年にコロラド党の派閥の一つとして結成された「倫理的コロラド連合運動」が前身となり、2002年に結党された保守派の政党である。このため、党員の多くは、コロラド党出身者である。

6 両政党とも、1887年に結党され、100年以上の歴史を持つ伝統的な政党である。

7 貿易額のデータは、中銀の2012年のデータを基に算出した。

ホンジュラス共和国 República de Honduras

「おきて造り」の仲間たちと、シャーガス病対策

橋本 謙

テグシガルパとの出会い

「けったいな街だなあ」2003年に3日間の会議のために初めて訪れた、ホンジュラスの首都テグシガルパを空の上と降りた地上から見渡したとき、そんな印象を受けた。

起伏に富む地形の上に、道路や住居区画を思いついたままにつくったようである。お世辞にも、美しいとは言いがたい。首都のトンコンティン空港も、山に囲まれているうえに滑走路が短いため、世界で最も着陸が難しい空港の一つとして知られている。碁盤の目のように整理されたグアテマラ・シティに当時住んでいた私の、胸の奥がもやもやした。

以降ホンジュラスには、会議のために2、3回訪れたあと、07年に計7カ月間出張した。その時、

首都の局所や地方都市に整理された町並みが見当たり、少し安心した。翌年08年には仕事の縁があり、ホンジュラスで3年間住むことになった。

日本による技術協力プロジェクト

そもそも私が中米に足を踏み入れたきっかけは、2000年に国際協力機構（JICA）の青年海外協力隊として、グアテマラのシャーガス病対策に参加したのがきっかけであった。

シャーガス病はラテンアメリカの風土病で、主に媒介昆虫のサシガメ（刺すカメムシ）を介して感染し、発病すると心臓、結腸などが肥大して死にも至る病気である。00年当時、ラテンアメリカ全人口の約5%が感染していた。

早くは1960年代から南米でシャーガス病の対策が始まり、またその経験と成功を受けて、97年に中米、アマゾン、アンデスの各地域で数カ国が集まり、シャーガス病の感染中断を目指した広域イニシアチブが生まれた。

00年、JICAはサシガメ駆除を目的とした技術協力プロジェクトをグアテマラで始め、03年にはホンジュラスとエルサルバドルに、09年にはニカラグアにも対象範囲を広げた。これらのプロジェクトでは、相手国保健省の国家プログラムに専門家を、地方の県保健事務所に青年協力隊員を配属させた。技術部門と実動部門の連携を高めて、保健省のマネジメント能力を強化する人事戦略である。

私の07年以降のホンジュラスへの赴任も、JICA専門家として、シャーガス病対策プロジェクトに参加するためであった。ホンジュラスでは、03～07年までは西部4県（オコテペケ、コパン、レンピラ、インティブカ）で、08～11年は中東部4県（ヨロ、コマヤグア、フランシスコモラサン、エルパライズ）も加えた8県を対象にサシガメ駆除を展開した。対象範囲が広がったため、もう一人のJICA専門家の中村二郎氏も、08年半ばか



テグシガルパ上空
（撮影：橋本謙）



中米の主要サシガメ 2 種
(作成：JICA シャーガス
病対策プロジェクト)



ら参戦した。

そこで当初の予定どおり、私は任地を首都から西部コパン県のサンタロサデコパンに移した。サンタロサデコパンは、18 世紀初期につくられた、石畳でコロニア風の街である。人口 6 万人弱で、こじんまりしていて、美しい。もちろん基盤の目状に造られていた。

貧困とシャーガス病

一方で、農村部に住む人たちは貧しく、多くの家庭に上水道も電気もない。汚れた衣服、用途不明の容器、農作物、農具などが散乱し、混沌とした小屋のような家に、7、8 人が住んでいるのはよく見る光景である。一軒当たりの人数が多い割には、ベッドの数がたいてい 3 つ以下と少ない。家の中においても、外の地面と変わらない土間の上で、寝ている子供もいるのであろう。ひびの入った土壁、藁ぶき屋根の家には、サシガメが棲みつく可能性がある。シャーガス病が「貧困の病」と呼ばれる由縁である。

ラテンアメリカ諸国に共通して言えることだが、貧富の差は著しい。ホンジュラスの最も裕福な人口 10% の平均収入は、もっとも貧しい人口 10% の平均収入の約 60 倍と、中米で最も高く、世界ランキングでもトップ 10 に入る。

監視システムをつくる

2008 ～ 11 年のシャーガス病対策プロジェクトでの私の任務は、殺虫剤散布によってサシガメの生息分布が減少した西部 4 県で、サシガメの蔓延が再び起きないように監視するシステムのモデルを設計し、導入する支援であった。プロジェクト終了後も持続するシステムをつくるには、ホンジュラス保健省の中央と地方の職員と連携しながら、さらに彼らが当事者意識をもつ形で進めることが重要であった。

そこでまず、保健省国家プログラム職員らと、監視システムの青写真をつくるワークショップを企画した。監視システムとは、住民が自宅で見つけたサシガメを最寄りの保健センターに届出ると、保健センターの職員が届出データを集めて分析し、家屋への殺虫剤散布や訪問調査をおこなう、という仕組みである。青写真は、この仕組みに誰が何をどのような基準で実施するかを示した図である。

このように述べると、青写真の作成は、なんら簡単な話のように聞こえる。中村氏も私も、1 日のワークショップで青写真は完成すると思っていた。しかし、保健省という組織の中で働く現地の職員には、上下関係があるうえに、異なる意見もあった。これらを引き出せる雰囲気をつくり、出てきた複

数の意見に対して、共通認識が得られるまで議論を重ねることを重視すると、完成までに 3 日かかった。

青写真を 6 つのパイロット保健センターに導入した後、現場視察を繰り返しては、関係者に話を聞き、フィードバックした。またパイロット保健センター、県保健事務所、国家プログラムの職員らと、計 6 回の定期報告会を開き、監視システムの現状、改善案などについて協議した。そして、監視システムの仕組みがある程度軌道に乗ると、他地域にも同システムを導入するためのガイドを作り始めた。これは国家プログラム職員らと、計 7 回のワークショップを通して完成させた。

これらの数々の議論において、日本人専門家はファシリテーションに徹した。議論をもっと導けば、ワークショップや報告会の開催回数を少なくできたかもしれない。活動経費を減らすこともできたであろう。しかし、ここで節約することで、保健省職員はどこまで学びを深め、どこまで当事者意識をもったのだろうか。

監視ガイドは、作成途中に一度膨大な情報量に膨れ上がった。あ

れもこれも大事と、気前よく活動や説明を含めることで、収集がつかなくなった。しかしそこから、実用化を目指して「削る」作業が始まった。必要最小限を見極める作業は、情報を増やす作業よりも何倍も大変であったが、そこで監視システムの核心を共有することができた。

実際に、出来上がった監視ガイドは、とても簡潔でわかりやすく、プロジェクトが終わった後も現地職員らに親しんで使われている。日本人だけで作成しても、ここまで使えるガイドはできなかったであろう。



監視システムの定期評価会での議論
(撮影：橋本謙)

ホンジュラス人の発想

しかし、ホンジュラス人の議論をファシリテートするのは大変だった。まず議題から外れるのは日常茶飯事で、そもそもの目的を忘れてしまうほどである。というものの、この連想ゲームの要素が入った余談がないと、議論が前に進まないのである。相手がラテン系でなく、アングロサクソン系であれば、論理的でテンポのよい議論を期待できるかと考えたこともあるが、“ラテン系”が起因しているとも言えないようだ。

私は隣国グアテマラやエルサルバドルでも仕事をするが、彼らが議題から外れる回数は明らかに少ない。もちろん国民性だけでなく、

それぞれの個性にもよるが、経験上この傾向を否定できないのである。

その理由を考えていたある日、あの乱雑なテグシガルパの町並みが、ふと頭に浮かんだ。「どうしてわざわざ曲がりくねった道を連ねるのか」「なぜあんな斜面に高いビルを建てるのか」発想の起点が論理的と言うよりは突発的、想定範囲があるのかなのか分からない。ただ、改善の余地があるにせよ、最後には街ができているのである。

実はシャーガス病対策でも、ホンジュラスは、他のラテンアメリカ諸国と異なる手法を手掛けてきた。例えば、他のラテンアメリカ諸国は、サシガメの生息分布調査の結果をもとに殺虫剤散布計画を立ててきたが、ホンジュラスは人間の罹患率を調べた結果を指標とした。また、家屋の殺虫剤散布は、どの国でも保健省の現場職員が担ってきたが、ホンジュラスでは研修を受けた住民が担当した。そもそもホンジュラスには、他国のように媒介虫対策専任の現場職員がいなかったために、同様の対策が取れなかったという背景はあったものの、異なる発想からその解決策を見事に見出した。

「おきて破り」も結果を出そうことができれば、「おきて造り」に変わるのである。議論の中で多々ある寄り道だが、その中のいくつかは実は近道であったのだろう。その近道を終結したことで、完成度の高い監視ガイドができたとも考えられる。

このような体験から、「良くも悪くも、何か意外なことをしでかすのは、ホンジュラスかもしれない」と頼もしく思うようになった。そして、あのけったいなテグシガルパ

の町並みも、独特の味があって面白い存在に見えてきた。

そして感染が減った

2000年から延べ75人以上の専門家と80人以上の青年海外協力隊が参加した、中米シャーガス病対策では、数々の創意工夫とともに成果も生み出すことができた。主要なサシガメ2種(*Rhodnius prolixus*, *Triatoma dimidiata*)の生息率を低下させ、そのうちの1種(*Rhodnius prolixus*)による感染の中断を達成した。その結果、中米におけるシャーガス病の推定患者数は、177万人から81万人に、年間の新規感染者数は、6万2000人から9000人に減った。



サシガメ駆除のための殺虫剤散布
(撮影：JICA シャーガス病対策プロジェクト)

12年以降はこれまでの取り組みや成果を記録に残す時期である。その一環として、『中米の知られざる風土病「シャーガス病」克服への道』（ダイヤモンド社）が今年初めに出版された。そして今、私は14年まで続く広域協力の専門家として、現場の知恵の結集であるベストプラクティス集をつくるために、グアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグアを転々としている。ちょっとした温故知新を楽しむ毎日である。

(はしもと けん 国際協力機構(JICA)
中米シャーガス病対策 広域アドバイザー)

感動的な人達。フィデル・カストロとムヒカ大統領

牧内 博幸



キューバ カストロ議長
CNN (2008年2月19日)の
記事から

海外の大使館で勤務する醍醐味の一つは、様々な文化、背景を持った人々との出会いがあることだろう。特に、強い感動を与えてくれる人物に出会うことは、自らの人間的成長にとって非常に重要な気がする。

この24年間の外国での勤務では、出来るだけ多くの人に出会って対話することを一つの目標としてきた。そんな中、上司の不在の時、また、上司等と一緒に多くの国家元首等に会う機会があった。2000年前後に約5年間キューバに勤務していた時は、当時まだまだ元気であったフィデル・カストロ前国家評議会議長に小さな会合や大きな会合で随分お会いした。08年から10年まで南米のウルグアイにいた時はホセ・ムヒカ大統領にも何回かお会いした。何れも小さな国だが、国家元首が国民から好かれ、また、国を上手く纏めている感じがした。この二人に共通することは、非常に庶民的だということだろう。

キューバは紺碧のカリブの海に浮かぶ11百万人の島だ。冬は時々

寒い風が吹き、夏はハリケーンが通り過ぎる国柄だが、基本的には年を通じて暖かく非常に過ごし易い。まだまだ物資が行き届いていないので国民は不自由な生活を強いられている。しかし、敵国として北に大きく君臨するアメリカ合衆国の膝元で、革命後のこの54年間、カストロ元議長の下で国として逞しく存在し続けている。

キューバは日本の官民に対して債務を抱えているため、偶に日本から債権交渉のために担当者が来訪する。1999年3月10日、民間債権交渉のために日本から来た担当者と交渉をしている時、その間を縫ってカストロ議長との協議を行うことが可能となった。私を含め5名が革命宮殿に招かれ、大きな会議室で約2時間いろいろお話した。革命宮殿1階で車両から降りて絨毯の上を歩き、エレベーターで上がってカストロ議長の執務室の階で降りた。担当の人の案内で会議室に向かった。エレベーターを降りて廊下の角を曲がったところで、遠く向こうに迷彩服を着て革の軍靴を履いた背の高いカス

トロ議長が見えた。一同緊張してカストロ議長の前に進み、一人ひとり名前を言って握手をしながら挨拶をした。背筋がピリッと伸びた長身のカストロ議長は、背の低い我々日本人の客人に、一人ひとり「ようこそ革命宮殿にいらっしゃった」と握手を交わしつつ、部屋の中に招き入れてくれた。

大きな会議室の大きなテーブルの片方に我々日本側5名が、向こう側にカストロ議長とお付きの秘書官が座った。債務の話をさっさと終えて、カストロ議長は日本の話を始めた。日本が本当に好きなようで、日本のことを話す時は本当に嬉しそうであった。若い頃は、日本人の親しい友人もいたようである。何よりも働き者である日本人を尊敬していて、キューバ人に日本人のように働いて欲しいとの思いが伝わってきた。また、70年代に半導体や自動車をめぐる北の大国アメリカ合衆国と小さな日本が貿易摩擦を起こしている時、日本が米国と丁々発止と渡り合っている姿が痛快のようであった。日本のことについて沢山の質問を受けた。最後に日本の貯蓄率について質問してきた。丁度通訳の方が日本の貯蓄率を覚えていたのでカストロ議長に数字を伝えた。「キューバも同じくらいだ」と言って自慢げだった。別れ際に、「この前日本に行った時は時間がなくて新幹線にも乗れなかった。次回は是非乗ってみたい。」と悔しがってい



ウルグアイ ムヒカ大統領
Google(2012年7月22日)の
記事から

た(1995年12月、中国、ベトナム訪問の帰途立ち寄り訪日を行ったが東京のみの滞在であった。2003年3月にはアジア歴訪の最終訪問国として日本を訪問し、チェ・ゲバラから強く勧められた広島も訪問した。その際、新幹線に乗れたとのこと)。

会議を終えて我々5名が席を立つと、カストロ議長が我々に近づいてきて「今日は楽しかった。本当に有難う」と一人一人と握手を交わし、また、日本の四季の話などしながら、エレベーターまで見送ってくれた。エレベーターの前では再度握手を交わした。右手で握手をして、左手を我々一人ひとりの肩に置いて、また、長身の顔から我々の顔を覗き込むように、「また、是非革命宮殿に来て下さい」と声をかけてくれた。私が、「キューバには3年住んでいる」と伝えたら、「キューバはどうだ」と質問してきたので、「エンジョイして生活している」と答えたら、大きく首を縦に振っていた。

カストロ議長の主義主張や政治手法についての評価は控えたいが、大きな国際会議などで外国の大統領等をもてなしているカストロ議長の姿を見ていると、我々一人一人に必ずや姿と全く変わらない。この誰に対しても同じ姿勢で接する姿が、会う人の全てに感動を与え、キューバ国民の気持ちを掴んでい

るのだろう。1959年1月の革命以来54年、敵国とする米国のお膝元で一国を維持する秘訣は、国民の心を掴むその人間的魅力にあると痛感した。

キューバよりさらに小さく、人口約300万人のウルグアイがブラジルの南にある。10年3月1日に、1960年代の軍政下でツパマロスという組織でゲリラ活動をしていたホセ・ムヒカ氏が大統領に就任した。ムヒカ大統領は軍政時代に約13年間収監された経験を持ち、収監中は数百冊の農学や科学関係の本を読んでいたと言われている。上院議員の夫人も革命の同志で共に収監されていたが、大統領になる前は、週末にヤマハのスクーターに夫人を乗せて市内を散策するのが常であったようだ。

ウルグアイはヨーロッパからの移民の末裔で構成された白人の国といえ、首都のモンテビデオはまるでスペイン都市のようだ。ワインと牛肉が美味しく、近年はコンピューターのソフト生産で頭角を現しつつある。ウルグアイの所々を見ていると、ムヒカ大統領を中心に良く纏まった国であるとの印象を強くする。

ムヒカ大統領は国家と国民の生活を守るために、軍政下でゲリラ活動を行っていた。その熱い革命の思いを今大統領として実現しているように思えてならない。牢獄

で読んだ農学や科学の本が活きているのだろう。農牧業や林業の発展の他、コンピューターを駆使した付加価値産業の振興に積極的だ。ある時、港近くの屋外レストランでオフィスの仲間と昼食を取っていた時、横の道路をムヒカ大統領と二人のお付きが歩いて行った。それを見た何人かが「ペペ! 元気か?」と叫んだ。ペペは大統領名前のホセの愛称だ。大統領は手を大きく上げて、「元気だ。有難う!」と言って立ち去った。町を平気で歩く大統領も大統領だが、庶民から声をかけられ、気さくにこれに応える国柄なのである。

2010年5月15日、新しく日本からのS大使が着任し、天皇陛下が認められた信任状を大統領に奉呈するため、独立広場に新築された大統領府を訪問した。私はお付き兼通訳で大使に同行し大統領執務室に入った。スペイン国王への信任状奉呈等にも同行したことがあるが、少し緊張する場面だ。しかし、大統領執務室に案内されると、ドアの向こうに大統領がお付きの秘書官と一緒に立って出迎えてくれた。大統領は堅苦しい仕来りを避け、常に普段着で国民に接することをそのスタイルとしていたとのこと、その日もセーター姿でニコニコと我々を迎えてくれた。早速、傍の小さなソファに大使と大統領が隣り合わせに座って歓談が始まった。まさに庶民から生まれた庶民のための大統領との印象を受けた。大統領制の良い一面を垣間見ることができた。

(まきうち ひろゆき 外務省中南米局
中米カリブ課地域調整官)

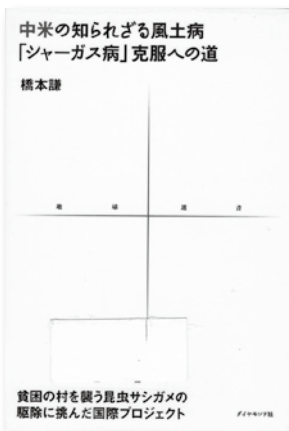


したたかな国キューバ シジヨンは揺れても倒れない

西林万寿夫 アーバン・コネクションズ 2013年5月 239頁 1,500円+税

2009年から12年まで駐キューバ大使を務めた著者は、米国でのオバマ政権の誕生、フィデル・カストロ国家評議会議長の退任とラウル・カストロの議長職継承という、いろいろな変化が起こり始めたキューバを見てきた。超大国米国と目と鼻の先にあり数々の制裁を受けながら、シジヨン（揺り椅子）の如く揺れても倒れないしたたかな国の姿を、3年半の在任中の出来事、見聞を時系列的に紹介し、読者がキューバについて理解を深めるようエッセイ風に述べている。

2009年の信任状奉呈や主要国駐在大使との意見交換から始まり、10年には日本から現職農水相はじめ来訪者が増大し、またペルー大使公邸人質事件をめぐる交渉、11年には東日本大震災犠牲者弔問にラウル議長が大使公邸に記帳にきたこと、米国の制裁緩和の動きの進展、アラブの春、金正日総書記の死とベネズエラのチャベス大統領のキューバでの病気治療などの世界情勢の変化があり、12年には海底油田試掘失敗や汚職追放、ローマ法王の来訪、仙台藩士支倉常長のキューバ上陸400周年に当たることなど、多方面からのキューバ像を示していて、変化を予見させる現代キューバを知る上で有益な解説書になっている。〔桜井 敏浩〕



中米の知られざる風土病「シャーガス病」克服への道

橋本 謙 ダイアモンド社 2013年2月 205頁 1,500円+税

シャーガス病は、媒介する昆虫サシガメ（刺すカメムシ）によって病原体が体内に入ると心臓が徐々に肥大し、心筋梗塞や心筋症を引き起こす恐ろしい感染症だが、サシガメは土壁や藁葺き屋根などに好んで生息するため、貧しい農村部に多く発生する。日本はこのサシガメ駆除のために技術協力専門家や青年海外協力隊を派遣して、中米各地で取り組んできた。著者はグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドルなどの第一線で、長くシャーガス病対策の専門家として活躍し、現在も国際協力機構（JICA）中米シャーガス病対策広域アドバイザーを務めている。

一世紀前に発見されたシャーガス病が、「貧困の病」といわれるゆえんの現地環境、在来・外来サシガメの存在、殺虫剤と治療薬、内戦と不安定な政治で遅れた中米の駆除対策の前史的な説明から、いよいよ中米で対策プロジェクトが立ち上げられ、サシガメの生息、分布状況調査、現地住民と協力しての活動開始、駆除が終わった後の監視活動強化等の再発生防止体制、村人たちへの生活改善啓蒙活動などの活動とその成果、現地での人材育成、そしてサシガメ駆除による「感染中断」認定後の展望を、直接現地ですまに最も貧しい農村の人達の生活の安全性を高めるために活動した記録が記述されている。〔桜井 敏浩〕

感動的な人達。フィデル・カストロとムヒカ大統領

牧内 博幸



キューバ カストロ議長
CNN (2008年2月19日)の
記事から

海外の大使館で勤務する醍醐味の一つは、様々な文化、背景を持った人々との出会いがあることだろう。特に、強い感動を与えてくれる人物に出会うことは、自らの人間的成長にとって非常に重要な気がする。

この24年間の外国での勤務では、出来るだけ多くの人に出会って対話することを一つの目標としてきた。そんな中、上司の不在の時、また、上司等と一緒に多くの国家元首等に会う機会があった。2000年前後に約5年間キューバに勤務していた時は、当時まだまだ元気であったフィデル・カストロ前国家評議会議長に小さな会合や大きな会合で随分お会いした。08年から10年まで南米のウルグアイにいた時はホセ・ムヒカ大統領にも何回かお会いした。何れも小さな国だが、国家元首が国民から好かれ、また、国を上手く纏めている感じがした。この二人に共通することは、非常に庶民的だということだろう。

キューバは紺碧のカリブの海に浮かぶ11百万人の島だ。冬は時々

寒い風が吹き、夏はハリケーンが通り過ぎる国柄だが、基本的には年を通じて暖かく非常に過ごし易い。まだまだ物資が行き届いていないので国民は不自由な生活を強いられている。しかし、敵国として北に大きく君臨するアメリカ合衆国の膝元で、革命後のこの54年間、カストロ元議長の下で国として逞しく存在し続けている。

キューバは日本の官民に対して債務を抱えているため、偶に日本から債権交渉のために担当者が来訪する。1999年3月10日、民間債権交渉のために日本から来た担当者と交渉をしている時、その間を縫ってカストロ議長との協議を行うことが可能となった。私を含め5名が革命宮殿に招かれ、大きな会議室で約2時間いろいろお話した。革命宮殿1階で車両から降りて絨毯の上を歩き、エレベーターで上がってカストロ議長の執務室の階で降りた。担当の人の案内で会議室に向かった。エレベーターを降りて廊下の角を曲がったところで、遠く向こうに迷彩服を着て革の軍靴を履いた背の高いカス

トロ議長が見えた。一同緊張してカストロ議長の前に進み、一人ひとり名前を言って握手をしながら挨拶をした。背筋がピリッと伸びた長身のカストロ議長は、背の低い我々日本人の客人に、一人ひとり「ようこそ革命宮殿にいらっしゃった」と握手を交わしつつ、部屋の中に招き入れてくれた。

大きな会議室の大きなテーブルの片方に我々日本側5名が、向こう側にカストロ議長とお付きの秘書官が座った。債務の話をさっさと終えて、カストロ議長は日本の話を始めた。日本が本当に好きなようで、日本のことを話す時は本当に嬉しそうであった。若い頃は、日本人の親しい友人もいたようである。何よりも働き者である日本人を尊敬していて、キューバ人に日本人のように働いて欲しいとの思いが伝わってきた。また、70年代に半導体や自動車をめぐって北の大国アメリカ合衆国と小さな日本が貿易摩擦を起こしている時、日本が米国と丁々発止と渡り合っている姿が痛快のようであった。日本のことについて沢山の質問を受けた。最後に日本の貯蓄率について質問してきた。丁度通訳の方が日本の貯蓄率を覚えていたのでカストロ議長に数字を伝えた。「キューバも同じくらいだ」と言って自慢げだった。別れ際に、「この前日本に行った時は時間がなくて新幹線にも乗れなかった。次回は是非乗ってみたい。」と悔しがってい



ウルグアイ ムヒカ大統領
Google(2012年7月22日)の
記事から

た(1995年12月、中国、ベトナム訪問の帰途立ち寄り訪日を行ったが東京のみの滞在であった。2003年3月にはアジア歴訪の最終訪問国として日本を訪問し、チェ・ゲバラから強く勧められた広島も訪問した。その際、新幹線に乗れたとのこと)。

会議を終えて我々5名が席を立つと、カストロ議長が我々に近づいてきて「今日は楽しかった。本当に有難う」と一人一人と握手を交わし、また、日本の四季の話などしながら、エレベーターまで見送ってくれた。エレベーターの前では再度握手を交わした。右手で握手をして、左手を我々一人ひとりの肩に置いて、また、長身の顔から我々の顔を覗き込むように、「また、是非革命宮殿に来て下さい」と声をかけてくれた。私が、「キューバには3年住んでいる」と伝えたら、「キューバはどうだ」と質問してきたので、「エンジョイして生活している」と答えたら、大きく首を縦に振っていた。

カストロ議長の主義主張や政治手法についての評価は控えたいが、大きな国際会議などで外国の大統領等をもてなしているカストロ議長の姿を見ていると、我々一人一人に必ずや姿と全く変わらない。この誰に対しても同じ姿勢で接する姿が、会う人の全てに感動を与え、キューバ国民の気持ちを掴んでい

るのだろう。1959年1月の革命以来54年、敵国とする米国のお膝元で一国を維持する秘訣は、国民の心を掴むその人間的魅力にあると痛感した。

キューバよりさらに小さく、人口約300万人のウルグアイがブラジルの南にある。10年3月1日に、1960年代の軍政下でツパマロスという組織でゲリラ活動をしていたホセ・ムヒカ氏が大統領に就任した。ムヒカ大統領は軍政時代に約13年間収監された経験を持ち、収監中は数百冊の農学や科学関係の本を読んでいたと言われている。上院議員の夫人も革命の同志で共に収監されていたが、大統領になる前は、週末にヤマハのスクーターに夫人を乗せて市内を散策するのが常であったようだ。

ウルグアイはヨーロッパからの移民の末裔で構成された白人の国といえ、首都のモンテビデオはまるでスペイン都市のようだ。ワインと牛肉が美味しく、近年はコンピューターのソフト生産で頭角を現しつつある。ウルグアイの所々を見ていると、ムヒカ大統領を中心に良く纏まった国であるとの印象を強くする。

ムヒカ大統領は国家と国民の生活を守るために、軍政下でゲリラ活動を行っていた。その熱い革命の思いを今大統領として実現しているように思えてならない。牢獄

で読んだ農学や科学の本が活きているのだろう。農牧業や林業の発展の他、コンピューターを駆使した付加価値産業の振興に積極的だ。ある時、港近くの屋外レストランでオフィスの仲間と昼食を取っていた時、横の道路をムヒカ大統領と二人のお付きが歩いて行った。それを見た何人かが「ペペ! 元気か?」と叫んだ。ペペは大統領名前のホセの愛称だ。大統領は手を大きく上げて、「元気だ。有難う!」と言って立ち去った。町を平気で歩く大統領も大統領だが、庶民から声をかけられ、気さくにこれに応える国柄なのである。

2010年5月15日、新しく日本からのS大使が着任し、天皇陛下が認められた信任状を大統領に奉呈するため、独立広場に新築された大統領府を訪問した。私はお付き兼通訳で大使に同行し大統領執務室に入った。スペイン国王への信任状奉呈等にも同行したことがあるが、少し緊張する場面だ。しかし、大統領執務室に案内されると、ドアの向こうに大統領がお付きの秘書官と一緒に立って出迎えてくれた。大統領は堅苦しい仕来りを避け、常に普段着で国民に接することをそのスタイルとしていたとのこと、その日もセーター姿でニコニコと我々を迎えてくれた。早速、傍の小さなソファに大使と大統領が隣り合わせに座って歓談が始まった。まさに庶民から生まれた庶民のための大統領との印象を受けた。大統領制の良い一面を垣間見ることができた。

(まきうち ひろゆき 外務省中南米局
中米カリブ課地域調整官)

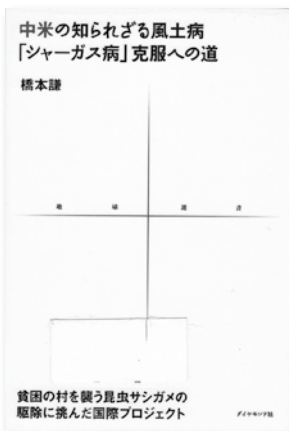


したたかな国キューバ シジヨンは揺れても倒れない

西林万寿夫 アーバン・コネクションズ 2013年5月 239頁 1,500円+税

2009年から12年まで駐キューバ大使を務めた著者は、米国でのオバマ政権の誕生、フィデル・カストロ国家評議会議長の退任とラウル・カストロの議長職継承という、いろいろな変化が起こり始めたキューバを見てきた。超大国米国と目と鼻の先にあり数々の制裁を受けながら、シジヨン（揺り椅子）の如く揺れても倒れないしたたかな国の姿を、3年半の在任中の出来事、見聞を時系列的に紹介し、読者がキューバについて理解を深めるようエッセイ風に述べている。

2009年の信任状奉呈や主要国駐在大使との意見交換から始まり、10年には日本から現職農水相はじめ来訪者が増大し、またペルー大使公邸人質事件をめぐる交渉、11年には東日本大震災犠牲者弔問にラウル議長が大使公邸に記帳にきたこと、米国の制裁緩和の動きの進展、アラブの春、金正日総書記の死とベネズエラのチャベス大統領のキューバでの病気治療などの世界情勢の変化があり、12年には海底油田試掘失敗や汚職追放、ローマ法王の来訪、仙台藩士支倉常長のキューバ上陸400周年に当たることなど、多方面からのキューバ像を示していて、変化を予見させる現代キューバを知る上で有益な解説書になっている。〔桜井 敏浩〕



中米の知られざる風土病「シャーガス病」克服への道

橋本 謙 ダイアモンド社 2013年2月 205頁 1,500円+税

シャーガス病は、媒介する昆虫サシガメ（刺すカメムシ）によって病原体が体内に入ると心臓が徐々に肥大し、心筋梗塞や心筋症を引き起こす恐ろしい感染症だが、サシガメは土壁や藁葺き屋根などに好んで生息するため、貧しい農村部に多く発生する。日本はこのサシガメ駆除のために技術協力専門家や青年海外協力隊を派遣して、中米各地で取り組んできた。著者はグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドルなどの第一線で、長くシャーガス病対策の専門家として活躍し、現在も国際協力機構（JICA）中米シャーガス病対策広域アドバイザーを務めている。

一世紀前に発見されたシャーガス病が、「貧困の病」といわれるゆえんの現地環境、在来・外来サシガメの存在、殺虫剤と治療薬、内戦と不安定な政治で遅れた中米の駆除対策の前史的な説明から、いよいよ中米で対策プロジェクトが立ち上げられ、サシガメの生息、分布状況調査、現地住民と協力しての活動開始、駆除が終わった後の監視活動強化等の再発生防止体制、村人たちへの生活改善啓蒙活動などの活動とその成果、現地での人材育成、そしてサシガメ駆除による「感染中断」認定後の展望を、直接現地ですまに最も貧しい農村の人達の生活の安全性を高めるために活動した記録が記述されている。〔桜井 敏浩〕

歴史の中の 女たち

第 29 回

ポリカルパ・サラバリエタ (1796 ~ 1817 年)

コロンビア独立に捧げられた花

伊藤 滋子

コロニアル時代、ヌエバ・グラナダ副王領（現在のコロンビア）の内陸部にある首都ボゴタにとって、マグダレナ河はカリブ海の港バランキリヤに出るための大動脈であった。マグダレナ河畔の村オンダと首都ボゴタの間にグアドゥアスという村がある。小さい村ながら、スペインからボゴタに送られたきた人、物、情報のすべてがこの村を経由していった。副王や司教、オイドールなどの要人が着任してきたときは、関係者は海拔 2600m のボゴタからグアドゥアスまで下って出迎え、遠来の賓客は時には一週間ほどそこで鋭気を養ってからボゴタまでの 120km 足らずの険しい道を上るのだった。一行の滞在中に大勢の従者から漏れ伝わる噂話、エピソードなどで、新しい為政者のイメージはすぐさま各方面に伝わっていった。

1782 年 2 月のある日の夕方、ボゴタからこのグアドゥアスにロバの背に揺られて一つの本箱が到着し、集まってきた村人が遠巻きに村役場の前に下ろされたその箱を取り囲んだ。辺りには陰鬱な空気が漂い、だれもが黙々とその箱を見つめるばかりであった。すで

に日が暮れはじめていたので、役人は箱をいったん牢に入れて厳重に保管、翌日その中身は木の檻に入れ替えられて村の入り口に掲げられ



<http://genderlatm.wp.horizon.ac.uk/wp-content/uploads/2012/12/Policarpa-Salazarrieta>

た。それはこの地方最初のスペインに対する蜂起であるコムネロスの乱を指揮したホセ・アントニオ・ガランの首だった。彼の父親はスペイン人だったが、彼自身は貧しいメスティソで、先住民に課せられた理不尽な課税に反対し、フランス革命に 6 年先んじて、平等を求めて立ちあがった。しかし反乱は鎮圧され、ガランは絞首刑にされたあと、切り離された頭と四肢は近隣の 5 つの村々に送られて晒され、財産は没収、家は取り壊されて塩をまかれるという、徹底的な見せしめの懲罰を受けた。だがそれ故に、数十年後に始まった独立運動の先駆けとしてその象徴とされるようになった。グアドゥアスにガランの頭が送りつけられてきたのは、そこが反乱の中心地であったからだ。

ポリカルパ・サラバリエタ、通称ボラがそのグアドゥアスに生まれたのは 1796 年 1 月 26 日とされている。彼女は村の入り口を通るたびに十字を切って短い祈りを唱えるように教えられたが、その意味を知るのはのちのことだ。ボラの父でクリオリョのホアキン・サラバリエタはバスク系の人で、手広く農業や商売を営んでいた。母もスペイン人の子孫で、典型的なクリオリョの一家が住んでいた、現在博物館になっているその家は、裕福な田舎の郷土の家といえる規模である。ボラがまだ幼い頃、父は妻と大勢の子供を連れて首都に引っ越した。ボゴタに住むことは彼の長年の夢であった。しかしそれから 4 年後、天然痘が流行したとき、ボラの父母と兄、姉の 4 人が相次いで亡くなった。残った 4 人の兄のうち 2 人はもともとアウグスティヌス

会の修道院へ入っており、2人は地方の農園へ働きに行き、姉が6才のボラと弟ビピアノを育てようとするが、生活に行き詰まり、2年後グアドゥアスに帰って親戚の家に身を寄せる。そして姉が結婚すると、弟妹たちも姉の婚家についていった。貧しかったボラは早くから裁縫師として働き、また村の子供たちに読み書きを教えた。

幼いころ村の入り口を通るたびに祈りを捧げたのはガランのためだったことを知るのは、ボラが村に帰ってからのことである。その頃首都ばかりでなく、グアドゥアスのような地方の村でも若者たちにヨーロッパの情勢や首都での政治的な動向を教えるためのテルトゥリアと呼ばれる啓蒙的な集会在盛んに開かれていた。ボラはそのなかでコムネロスの反乱の口火を切ったのはソコロの村に住むマヌエラ・ベルトランという一主婦だったということも教わった。その女性は、先住民が生産した焼酎や煙草が強制的に政府に徴収されて専売に付されるという王令が出されたことを知ると、居並ぶ男たちを尻目に、王や役人たちをののしり、役所の前に掲げられた掲示板を引き抜いてその布告を破り、燃やしてしまった。彼女の行為によって男たちは目が覚めたがごとく、役所の倉庫に突入して焼酎を道路にぶちまけ、煙草を燃やした。なんとも良い香りで始まった革命である。そこへガランが現れ、勢いに乗って役場の金庫までこじ開けようとしていた人々に、「そんな穢れた金に手をつけるために加勢にきたのではなく、自由と平等を求めるためにきたのだ」といって、それを押しとどめた。たちまち首領に担ぎあげられた彼の人気はいや増すばかりだったから、役人たちはどうしても彼を八つ裂きにして見せしめにする必要があったのだ。

1808年、フランス皇帝ナポレオンがスペインを侵略し、フェルナンド七世を退位させて自分の弟をスペイン王につけると、スペイン人はそれに抵抗して戦い、イスマノ・アメリカの人々にもそれに同調するように呼び掛けた。しかしスペインの支配に不満を募らせていたクリオリヨはその機会を利用して、1810年、各地でスペインからの独立を宣言した。ヌエバ・グラナダ副王領の首都サンタ・フェ・デ・ボゴタでは1810年7月20日、独立宣言が行われ、またたく間に革命は野火のごとくエクアドル、ベネズエラにまで広がっていった。副王を頂点とするスペインの支配のなかで、税や処遇の面で何かと差別されてきたクリオリヨの間にはそれほどに不満が鬱積していたのだった。それはガ

ランの乱を知る人々にとってはまさに彼の反乱の再来のように思えた。

しかし、攻防が続き、まだ独立が達成されないうちにナポレオンによって解放されたフェルナンド七世が6年ぶりにスペイン王に返り咲くと、以前にも増して反動的な絶対王朝が始まり、スペイン政府は自由主義者を迫害するとともに、イスマノ・アメリカ各地で起きていた独立運動を一気に押えこもうとした。ヌエバ・グラナダには、1815年、それまでナポレオンと戦ってきたパブロ・モリリョ将軍が戦艦18隻、1万5千人を率いて送りこまれてくる。彼は独立を宣言したカルタヘナを108日間封鎖、6千人の市民を餓死させ、美しい都市はほとんど瓦礫と化すほど破壊しつくされた。モリリョはこのあと軍を各地に進め、翌年半ばにはヌエバ・グラナダ副王領全域の主権をほぼ回復させ、ヌエバ・グラナダとベネズエラにできた第一共和国は崩壊に追い込まれた。ついで革命軍兵士の探索と軍事法廷がはじまり、多くの人が銃殺され、人々の間に恐怖がひろがる。スペイン人たちは植民地支配を続ける唯一の方法は恐怖を植え付けることと心得て、市民を扇動したという罪で大勢の人々を処刑した。中でも真先に殺されたのは知識人や高等教育を受けた人々であった。こうしてパブロ・モリリョ将軍はヌエバ・グラナダとベネズエラ的第一共和国を潰すことには成功したが、アメリカの若者の心に燃え上がった自由への欲求を消すことはもはや不可能で、やがて各地でゲリラ戦が広がっていった。だが恐怖政治は1819年シモン・ボリバルがボゴタを奪回するまで続いた。

グアドゥアスにいたボラも革命軍の情報網の一員として働いていたが、探索が厳しくなり包囲網が次第に狭まってくると、1817年、遂に追いつめられて身を隠さなければならなくなった。同志のほとんどは東部のリャノスやカサナーレに本拠をおく革命軍に合流していったが、ボラについては、仲間のひとりがボゴタに住むアンドレア・リカウルテ夫人に頼みこんで、弟のビピアノと一緒に暮らせるようにとり計らってくれた。ボラには同い年のアレホ・サバラインという、マグダレナ河のオンダ生まれの恋人がいた。アレホは早くからナリニョ将軍の軍に入り、その指揮下で、王政派の牙城である地勢の険しいコロンビア南部の山岳地帯で行われた数々の伝説的な戦いに参加し、ほとんど戦いの中で成人してきた若者である。王軍に捕らわれて一度は死刑判決を受けたが、刑の執行寸前にフェルナン

ド七世の王妃懐妊の報が届いて恩赦で減刑され、その後逃亡に成功して諜報活動に従事していた。共に闘う同志として、あるいは恋人としてすべてを分かち合っていたボラはリャノスに向かうアレホに書類を託し、涙のうちに彼と別れた。書類はボラからリャノスの総指揮官への報告書や隠れて活動する諜報員や王軍内の協力者のリストなど、重要なものばかりだった。

ボゴタにきたボラはこの時 20 才、真珠のような肌をした、美しく知性あふれる彼女の参加で情報網の活動は一段と活気を増した。アンドレア・リカウルテ夫人の家は家族をあげての革命派で、1810 年 7 月 20 日の独立宣言には夫の父や兄弟全員が参加、夫の父はその後の戦いで命を落としている。夫人の家は山に潜伏しているゲリラたちの間の情報を取りまとめ、情報や、資金、人などをゲリラに送りだす、革命軍のボゴタにおける連絡拠点であった。新参でまだ顔を知られていないボラは市内を自由に歩き回ることができたので、ゲリラとの連絡係を務めた。あるいは兵士に食事や家族の伝言を届ける女たちに紛れて兵営に入り込み、彼女たちとの何気ない会話から兵士がどこへ送られようとしているのか、軍がどんな準備をしているのかなどを探り出し、市場で商人たちの噂話に耳を傾ける。また彼女は裁縫師だったから、軍の高官のお屋敷にも出入りしてその夫人たちの洋服を縫いながら重要な情報を集めた。

政府側は、ボゴタから 500km も離れたカサナーレに本拠をおく革命軍にどうして自軍の情報が伝わるのか、なかなか探りだすことができずにいた。アンドレア夫人の家には農民が宿を恵んでもらうふりをして泊まりにきては、検問にあっては見つからないように、手紙をポンチョの裾に縫いこんで帰っていく。15 才の弟のビビアナも最も信頼のおける諜報員で、彼もすでに戦場で戦った経験があった。男たちばかりでなく、この革命は女性も子供も巻き込んで、民衆の総力をあげて行われていた。情報合戦はますます盛んになり、見つかって銃殺されるものが増えていくが、ボラのことを洩らすものはだれもいなかった。しかしとうとう組織の存在が敵の知るところとなり、アンドレア夫人は目立たない粗末な家に引っ越す。もはや彼女の家

道士となったボラの兄などごくわずかな人だけであった。

その夜のことをアンドレア夫人は次のように語る。「月の明るい夜でした。いつ訪問者があるかもしれないので、私たちは遅くまで起きていました。夫は子供を連れて彼の母親の家へ行き、居間には私とボラとビビアナの 3 人がいました。すでに 11 時を過ぎており、私は妊娠中でしたので、そろそろ休もうとしていた時、突然、扉を壊す大きな音がして、驚いた私たちはその場に立ちつくしてしまいました。すぐに兵士たちが入ってきて、ボラを厳しく尋問し始めました。彼女はそれに激しい言葉で応じながら、足のつま先で私をつまみます。すぐさま彼女の意図を察した私は、激しいやり取りにいたたまれず、その場から逃げる風を装っ



刑場に引かれるボラ

<http://www.banrepcultural.org/blaavirtual/historia/palabras-que-nos-cambiaron/imagen/policarpa-salavarrieta-marcha-al-suplicio>

て寝室に入り、ボラのベッドの下から書類を取り出して服の下に隠し、居間と反対側の扉から中庭に出ました。そして見張りのものに金をやり、台所に入って、ちょうどトウモロコシを煮ていたかまどにそれを投げ込みました。すばやく行動したので、居間にいた兵士たちは私が台所へいったことに気がつきませんでした。焼いた書類は革命軍の通信書簡、資金を援助している人のリスト、スペイン軍の兵力に関する報告などで、敵に

知られれば数多くの犠牲者がでるような、非常に重要なものばかりでした。居間に戻った私はボラにそっと頬笑み、彼女はすべてうまくいったことを了解しました。安心したボラはようやく時間稼ぎのための激しいやり取りを終わらせ、『私の言うことが信じられないのなら、どうぞ家の中をどこでも探しなさい』といい、それから家宅捜査が始まりましたが、結局彼らは何も見つけることができませんでした。彼らは我々を 3 人とも連行しようとしたましたが、私が妊娠中だったのと、ボラが、『昔からの知り合いでもなく、ただ宿を提供してくれただけなのに、なぜ彼女まで巻き込まれなければならないのか』と抵抗したため、私は連れて行かれずに済みました。」

実はボラは逮捕される数週間前から尾行されていて、アンドレア夫人の家が隠れ家であることを突きとめられていたのだった。そのきっかけとなったのは恋人アレホの逮捕だった。彼は 6 人の仲間とともにリャ

ノスに行く途中で捕らわれ、ポラが託した書類は押収されてしまっていた。リャノスの総指揮官あての報告書はポラが革命軍の諜報員であるという動かぬ証拠となった。

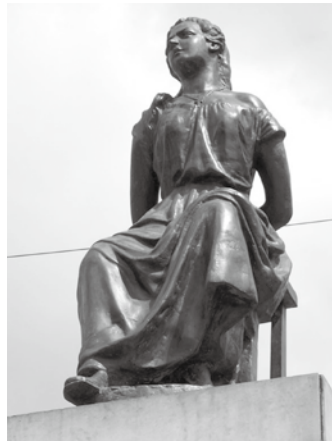
ポラが入れられた監獄は中央広場に面した副王宮殿のすぐそばで、カテドラルにも近い。ビビアノは裸にされて鞭で打たれ、家に入出入りしていた者の名を明かせと厳しく尋問されたが、とうとう口を割らなかった。そしてまだ15才というので、3日後に釈放された。

訊問者たちはポラに仲間の名を明かせば命だけは助けてやる、と言ったが、彼女はこれに対して、「自分が助かりたいがために私に仲間を裏切れと？ それは愛国者のすることではなく、あなたの方様な臆病者のことです。ええ、私はすべてを知っていますとも。でも私の口から何かを聞き出せると思ったら大間違いです」と相手を嘲り笑った。やがて軍事裁判が開かれ、銃殺刑の判決が下された。

1817年11月14日、副王宮殿の前の中央広場に刑場がしつらえられた。死刑囚はポラとアレホなど8人の革命軍兵士と王軍の脱走兵1人の計9人だったが、だれもポラしか見てはいなかった。彼女は青い服を着て肩をそびやかし、しっかりとした足取りで現れ、知り合いを見つけると別れの言葉を述べたり挨拶を交わしたりした。いかにも堂々としていて、勇気あふれるその態度は人々を圧倒し、見方によってはふてぶてしくさえ見えるほどであった。二人の神父が付き添い、心安らかに死を迎えるために共に祈るように勧めたが、彼女はそれに耳を貸そうともせず、居並ぶ3千人の兵士たちに大声で呼びかけた。「賤しき兵士たちよ、その銃口を祖国の敵に向けなさい。何と無感覚な人々よ。もしあなた方が自由の尊さを知っていればあなた方の運命はもっと違ったものになっていたでしょうに。でも今からでも遅くはありません。ごらんなさい。若くてしかも女の私ですが、死を恐れてはいません。何度でも死んで見せます。この模範を忘れないで... みじめな民よ、あなた方に同情します。いつの日にかあなた方も誇りを持つ時が来ますように。」そして涙を流す観衆に向かって「私のために泣くことはありません。その涙は奴隷に貶められている同胞のために流してください。私の死を無駄にしないで、あなた方の役に立つ

ようにして下さい。どうか立ちあがって、いま受けている迫害や不正に抗議して下さい」と、叫んだ。刑の執行者たちは彼女の声を打ち消そうと、一層激しく太鼓の音を響かせなければならなかった。ポラは最後に彼らに向かって「人殺し！女を撃つなんて。待っていなさい、いまに私の復讐してくれる人が現れるから」とののしったという。刑の執行者たちは壁に向かわせて背中から撃とうとしたが、彼女はそれを拒み、椅子に座った姿勢で正面から撃たれることを望んだ。刑の執行の前に目隠しされようとしたのを断わったが、発射命令が下されると自分の服の裾で目を覆い、そこには祖国万歳と刺繍されていたという。

処刑が終わったあと、男たちの遺骸は市内を引きずりまわされたが、彼女の遺体だけは修道僧である二人の兄に引き渡され、彼らの手でアウグスティヌス会の教会に埋葬された。弟のビビアノもこののち僧籍に入った。



ボゴタ市内にある銅像
http://commons.wikimedia.org/wiki/File:Pola_Bogot%C3%A1.JPG

数年後、独立が達成された後のこと、ボゴタの劇場でポラの生涯を描いた劇が上演された。彼女が銃殺される場面が近づくと、総立ちになった観客は舞台にたまごやトマト、タマーレス（トウモロコシの粉の料理）、小石などを投げつけ、ポラが殺されるのを阻止しようとした。俳優たちは身の危険を感じ、劇場が壊されかねない騒動となるに及んで、一計を案じた小屋主が舞台に上

って観客を制した。彼はまず「祖国万歳！」とポラのセリフをまねて叫んだうえで、「われわれ一同はボゴタ市民の皆様の満ち溢れる愛国心に非常に感銘を受けました。よってその気高いお志に鑑みて、死刑判決をくつがえし、彼女に英雄としての栄光を贈るのみにいたします。」と述べた。ようやく観客は攻撃の矛先を納め、劇場は拍手喝采のどよめきに包まれた。

同時代に革命軍の中で戦い、殺された女性には彼女ひとりではなかったが、その勇気と負けじ魂でポラはイスマノ・アメリカ全土で独立戦争を戦った女性たちのシンボルとなり、のちに彼女が処刑された11月14日はコロンビア女性の日と制定され、彼女の肖像画は紙幣や硬貨にもなった。

(いとう しげこ)